
魔法少女リリカルなのは ~ 転生者の災難 ~

月森 和樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～ 転生者の災難～

【Nコード】

N9319V

【作者名】

月森 和樹

【あらすじ】

老人を庇って死んでしまった恭二。

神によって転生させられてリリカルなのはの世界へ

あと一人転生者がいますが気にしないでください

プロローグ(前書き)

初めまして、月森和樹です。

作者の気まぐれ100%なので、更新が遅いかもしれません。

ではごっご

プロローグ

恭二side

今、白い部屋にいます。隣には知らない男性がいました。どうしてこうなった。

〈回想〉

僕は月島恭二、大学一年生。

家族は母と兄と僕の三人家族。

そして今は、バイト先に向かっていた。

「ああ、そろそろ夏休みか…」

そうつぶやくきながら諦めていたことがあった。それは、バイトできる時間が少なくなる。別に彼女が欲しくないわけじゃない、ただの埋め合わせとして連れていかれる。多い時で10連続、少なくとも5連続。

あまりやりたくないのだが、僕の兄もそうしていたから。

あっ、ちなみに僕は兄を慕っているし、憧れでもある。兄は成績優秀、スポーツ万能、イケメンの三拍子を揃えている人なのだ。みんなは僕にこう言う「恭二君のお兄ちゃんって出来ないことある？」

無いと言えば嘘になる。だってみんなは知らないから、兄は天才ではない、秀才である。そう、兄はすべてに置いて何事にも全力で取

り組むまさに努力家、それには理由があるがこの次で…
とバイト先に向かっているとそこでは、おじいさんが引かれそうに
なっていた(トラックに)

みんなはおじいさん危ないと言って動かない。

(ど…ど…どしよ!?)

考えてるうちに体が反応した。

〜回想終了〜

「で、気付いたらトラックに跳ねられてここにきました」

「いいことしたな恭二、自分の命を考えないで人を助けるなんて普通
できないぜ」

隣に居た人とそこにあった○面○イダーの映画をみながら、お茶を
のんでいました。

s i d e o u t

海 s i d e

俺の名前は会堂海、恭二と同じ大学一年生だ。

終わり早くない!!!

s i d e o u t

と言うワケで会堂君と友達になりました。

ビデオ観賞中

海「嘘だろ！！ディ○ケ○ドが敵になるなんて・・・あっ、やめろ
それじゃ世界が・・・」

会堂君は人ことが多いようです。ですが、僕も人のことは言えませ
ん。なので黙ります

「すげー、オールライダーだ。やっぱり、キバだよな」

「いやいや、カブトじゃよ。」

「いや、キバだ」

「カブトに決まっておるじゃろうが」

あれ？いきなり老人と女神かな？が現れた。

「忙しいところすみません。おじさんと後ろにいる女性は誰ですか
？」

「わしは神じゃ、あっ、後ろにいるのは、秘書のルミンじゃ。」

あの人見たことあるな？ あの時

「あの時のおじさん!？」

「すまんかった。たまたま、人間界を見に行つたばかりに」

「いえいえ、あの時は仕方ないですよ」

「嘘つかないでください。あの時はゲームの発売日とか言って、会堂海と言う人間を殺してしまった責任を逃れるためじゃないかしら」
とルミンさんから。えっ!何で庇ってしまったんだろう

「おいじいさん、何故そんなことした」

会堂君怖いよ。いや元々この人が悪いんだし。

「仕方ないじゃん。間違えてコーヒーこぼしたんだし…」

心を読まれた気がする。

このあと1時間近く討論が続いた。

そのあと……

「と言う訳じゃから、おぬしらを転生させる。その世界は、リリカ
ルなのは似た世界じゃ」

な……なんだって!!!。考えてもいなかったが、何故その世界
に?

「それは、神さま(笑)が今はまっているからです」

ルミンさん、心を読まないでください。

「チートはありますか？」

会堂君それはない「ありじゃよ」「えっ、ありなの（ ; ; ）

「じゃ何にするのじゃ？」

「魔力はEX、身体能力は超人級、イケメンで……」

会堂君は化け物になるつもりかな

「分かった。おぬしはなにがいい。」

ありなんだ。

「じゃあ……で」

「分かった。と言う訳で 逝っていい」

文字ちがくない

恭二side out

主人公紹介

名前：井伊神 恭二（いいがみ きょうじ）

身長、体重：無印編から

能力：神の図書館、前面装甲

神の図書館

簡単に言つとすべてのことがわかる

前面装甲

想像したもの（すべて分かって無いといけないが）に変身、展開できる

神さまを助けて死んでしまったため転生させられた。

性格はおとなしく、消極的であるがやるときはやる人間である。

そして何故か、神性がある

ステータス

筋力	EX
魔力	EX
耐久	SS
幸運	S
敏捷	SS
神性	C（前世ではA）

プロローグ（後書き）

次回予告

転生者の恭二は始まりからもアクシデント発生。
レイクも大変

次回、原作ブ

二話 原作ブレイクも大変（前書き）

頑張りました

ではござい

二話 原作ブレイクも大変

恭二 side

目を覚ますと見知らぬ部屋にいた。

「そうか、僕確か転生者だっ・・・」

鏡を見て僕は絶句した。

「身長が縮んでる!!!!!!」

ああ鬱だ死のう。そういえば、神さま（笑）が電話しろとか行っていたな。

と言う訳で電話してみました。

「あの〜もしも「はい。いろんな人の相談役の」あっ、間違えました」

とつさに電話を切った。てかあの人テンション高っ、高すぎて相手にできない。

「電話だよ、電話だよ。」

着信音がおかしい、とりあえずでしてみた。

「はい、もしも「はい。君ってひどいね、電話をいきなり切るなんて」すいません、あなたは誰ですか？」

「ああ私、私はヴァールって言うの、よろしくね」
ヴァーリ？ 確か北欧神話の女神様だったけ

「女神様が何のようですか？」

「すぐに分かっちゃったか、お姉さんは運命を「感じません」あなたってひどいのね」

ああ疲れる。神ってみんなこんな感じなのか

「こんな感じよ」

心を読まれただと、まあ仕方ないか神さまだし

「用件は何ですか？」

「ええーそれは、ヒ・ミ・ツ」切りますよ」「いやーひどいのね。

ああ、用件は二つ、一つが神の図書館の能力について、神の図書館は分かるだけではなく、体が変わらなければ使えるよ。例えば、Fのファイアなど。

二つ目は、原作ブレイクはしてもいいよだって。伝えることは伝えたからあとは聞きたいことがあったらねらしくしてね お姉さんとのや・く・そ・」

電話を切りました。

さあ、原作ブレイク始めるか。まずデバイス作りから。

とりあえず、形は邪魔にならないよう・・・無理だな邪魔にならないようにするには、まあ、腕時計でいいだろう。ばれそうにないし・・・あとは、色んなものをつっ込んでできた。

『・・・起動を確認。コードを』

「術式は、ミッドチルダ式とベルカ式の両方で」

『了解、術式認証。次のコードを』

「個人データなどなど転移」

『了解、データ認証。次のコードを』

「デバイス名称設定。デバイス名は……《ネロ》」
設定完了。お疲れ様でした。と言う訳だから。

「ネロ セットアップ」

『オーライ、スタンディングバイ』

原作では英語だが、読めないから、デバイスに全部和訳させる。

セットアップが完了すると、イメージと違う姿だった。

黒と白の予定が、何故かダンテとアーチャーを混ぜたような感じだった。まあ、好きだけど。

中は黒の甲冑に外に赤いコートの組み合わせ。
気にしない、気にしない

『マスター、そろそろ時間じゃないのか。』

時間を見るとアリサとすすかの誘拐されている時間だ。

「ネロ、場所は分かるか？」

『問題ないぞマスター。ここから200メートルぐらいだ』

「遠すぎだぞ、転移魔法を使う。」

流石に4歳児の体では保ちません。

『了解した、マスター。しかし、このかつこで行くのか？』

ネロにいわれてみればそうだ。うん、神の図書館起動。

変装魔法検索・・・発見、使用対象：俺、任意選択：ネロ、同時検索
ファイズギア・・・発見、スキル変更、前面装甲、使用時：任意、設定完了。

「ネロ、準備できた。転移と同時に変化。」

『分かった。こちらの準備は大丈夫だ』

「転移開始」

転移終了

状況確認

「トレースオン
同調開始」

地形確認：完了

人数確認：完了、20人、武器：ナイフ、アサルトライフ、グレネードその他：3人

救出経路：発見、突入開始

「いくぞネロ、これが最初のブレイクだ」

『了解したマスター。私は地獄の果てまでついていくぞ』

side out

忍side

そこは廃棄された工場。そこに柄の悪そうな20人ほどの男。私と
すずか、そしてバニングス家の女の子が縛られていた。男たちの会
話からして、この町の財閥の人間を捕らえたんだと思う。

「月村家、バニングス家の令嬢か、これは期待できるな。」

その目は、飢えた獣のような目だった。

(この子たちでも逃がさないと)

「やめてください。お願いですからこの子たちだけでも、逃がして
ください」

「何だ姉ちゃん、少し待つてな、あとで相手をしてやるから」

と男たちがすずか達に違って行く。

もうだめだと諦めていたとき、

ドオオオン

轟音が聞こえる先をみると、男がいた

side out

恭二side

「危ない、危ない。」

壁をミニフレアで壊すとそこには例のお嬢さん方と犯人達がいた

「おい、お前ら抵抗するな。したら、痛い目にあつぞ」

「何だてめえは、いらつく野郎だ。お前らやつちまえ」

男達が近づいてくる。

てか、きれんのはや。

「さあ、いくぞ」

俺はファイズフォンの5を三回押した。

《Standing BY》

「変身」

《complete》

「何!?!」

そりゃ驚くよね。そう思いながら次々と倒してゆく。

無双、楽しい。

『マスターよ、人質を取られているぞ』

まじかとアリサ達をみると

「動くなよ、動いたらこいつらを」

とナイフを向けて脅している

そこで泣きそうなアリサとすずか。

「ある奴が言っていた。」

言ってファイズアクセル モードにする

「止まねっていつているだろ」

「男としてやってはいけないことそれは、女を泣かせることと食べ物を粗末にする事だ」

「止まねっていつてんだろっ！！！！」

男はついに我慢が解けてすずかをナイフで切るうとした。

「やめてええええ！！！！」

忍さんが叫んだ

side out

忍side

すずかが される。 と思いつさに叫んだ。

目を閉じていた。すずかが なんだと思って、いや、いや、いや。否
定し続けた。

トン、トン、トン。

足音が聞こえたから目を開けると、思っていた風景とは違っていた。

side out

恭side

あつ危な、ギリギリセーフ。

変身を解除する

「あ……ありがとう。あなたは一体」

「俺か、世界の悪を許さないものかな。

まあいいや、じゃあね。可愛いお嬢様方。」

と一言残したあと颯爽と、バイクで移動した。

『少し聞きたいのだから、バイクの免許は大丈夫か』

ネロ、何を言うんだ。偽造しただけであるわけないじゃないか

『そうなのか、まあ気にしないでおっつ』

助かる。

とある公園である人物を見かけた。それは、高町なのはだった。とりあえず、悩みを聞いて、遊んだら、仲良くなった。そしてついでに士郎さんのケガを直した結果、

「さあ、剣をとれ」

・・・何故

それは、少しもどる。

～回想～

5年後

俺は暇だったため、翠屋に向かっていった。

「いらしゃい恭二くん」

彼は、高町士郎さん。あの後病院へいき、フルケアルを唱え、翌日退院した。

もちろん、医者青い顔になっていた。

という訳でまたにここにくるわけだが、今日は雰囲気かきがついてた。

いつもどおりになのはちゃんと話いると、

「おい、お前」

いきなり恭也さんが話かけてきた。

「はい、なんでしょう」

といいながら話を聞き流していた。

だが、直訳するところだ
おい坊主、あの時はなのはがお世話になったが、俺の妹はやらん。
欲しかったら、俺と勝負しろ。とのことだ。別になのはが興味ない
のになぜ勝負しなきゃならないんだ。
「・・・／＼」

何故なのはは頬を赤く染めてるんだ

『本当にわからないのか』
うん、全然。

そのことが逆鱗に触れたらしく、今にいたる

～回想終了～

このシスコンめ。後でO H A N A S H Iされてもしらないぞ

「恭二くん、頑張って」

恭也さんの殺気がさつきよりも増した。ちよ、恐いですって

とまあ、恭也さんとの戦いが終わった。

結果は、俺の苦勝だった。内容は、すごく化け物じみた戦いで、土
郎さんが貸してくれた武道館が半壊した。

普通だったらひくはずなのに、

何故なのはが家に帰してくれない。帰ろうとすると「帰っちゃうの
と涙目＋上目を使われてライフポイントが0のままだ。もっともこ
のままじゃ泊まるハメになる。

「なのはちゃん、もう帰るから」帰っちゃうの「うん、家の人が心

配するし」

やったよネロ、何とか生きて帰れるよ。

『そ・・・そうか』

何とか翠屋から帰る（脱出）に成功した。

『そういえばマスター、君は学校に行かないのかね』

「うん、行く気ないし」

突然何言い出すんだ。

『学校にはいった方がいいんじゃないか。君の前世のこともあるからな』

ネロに痛いところをつかれた。

そして俺は

私立聖祥大附属小学校に入学した

二話 原作ブレイクも大変（後書き）

つかれた。もう次回予告で

恭二「なにいつているんだこの人」

頼むよ。 パタ

恭二「あつ、睡眠タイムにしゃがった。まあいいや」

恭二「俺も学校に行くことになった。これからは本格的な戦闘にはいるからにのがすな。」

次回、戦いはつらい」

戦いはじらい（前書き）

すみません。急いで出さなきゃいけない事情ができました。

ではじらい。

戦いはつらい

恭二 side

「月島恭二です。よろしくお願いします」

とまあ私立聖祥大附属小学校にきたわけだが、とりあえず変装魔法で前世俺になった。理由は2つ。まず一つ目は、なのはにばれないようにするため。2つ目は、前世はすごく体が弱そうに見えたらしく体育の時はよくみんなに心配されたからである。

あっ、ちなみに苗字がちがうのはばれないためだ。

「はい、恭二君は家の都合でこの学校に入りました。皆さん、仲良くしてくださいね」

先生がかかるく説明すると

「得意なことはなんですか」

「好きなタイプはなんですか」

「恭二君は男ですか女ですか」

「付き合ってください。」

「必ずあなたを、幸せにします」

と質問の嵐。ってか、最後のらへんおかしくない。俺は男だよ

「はいはい、静かにしなさい。転校生が困ってるでしょ」

パアン、パアンと手を叩きながらきたのは・・・アリサ・バニングスだった。

「はい、一人ずつ当てるから」

アリサさんのおかげで、何とか質問の嵐を越えられた。そのなかで「男娘、ハア、ハア」とか聞こえた。選択ミスったかも。

質問の嵐を越えてからの一時間目だ。時間割りをみると質問の嵐を越えてからの一時間目だ。時間割りをみると学活だ。

「先生、転校生がきたから、席替えがしたいです」

「マスター、大丈夫か」

ネロ、心配するのが遅い

「すまない」

いやいや、大丈夫だよ。ところで何か用？

「ああ、さっき神から連絡がきてるぞ」

待ってるやることをやったら、連絡するから

「?なにをするんだ。」

くじ引きだよ。

「?????」

今席替えしてるんだよ

ネロの返事を待たず、くじ引きを引いた。

結果・・・望んだとうりの一番下の窓口の席。だが、

「恭二君、よろしくね」

「・・・・・・・・」

魔○・高町さんが隣でした。

し…しんどい。なんで大学生が小学校の問題をとかなきゃいけないんだ

今は四時間目です

すぐくつらい。見た目子供、頭脳は大人の名探偵並みに。あいつよく耐えたなこんなつらいことにorz

いやまて、これでバレたら…いやいや、ばれたくない。

おいネロ、魔力リミッターをF以下にしてくれ。

『マスター、そしたら戦う時はどうするんだ』

機体やライダーでどうにかする。

いちいち検索するのは面倒だから、ライダーだけそっちに送るから

『私を使う機会がないんじゃないのか』

そっちは練習やまずいときに使う。俺が魔導師とバレたら毎日O

H A N A S H iのような感じがするよ。

『仕方ないじゃないかマスターだから』

ひどいよこのデバイス。 まあ仕方ないからライダーのデータ転送。

『転送が完了した。』

とりあえずに「恭二君!!」「はいい」

「何驚いてんのよ」

だつて今忙しかったし

「すみません。ちょっと考えごとをしていたもので、でなんでしょうか」

大丈夫じゃないやこの席

「あなたが転校したから色々困ると思うから。教えてあげるからちよつと屋上いくわよ」

え?なぜ屋上で

「アリサちゃん、ちゃんと言わないとダメなの。恭二君、一緒にお昼たべない?」

ああ昼食ね。どつりでお腹が減ると思った。

「ごめんなさい。今日はお昼を持ってきてなくて…」

「それは大変じゃない。あなたの家族は何やってるの」

何やってるていないが。まて、これはまずい。親がいなくて言うたら…

～ 想像中 ～

〜終了〜

ま、ま、まずい、ここで選択をミスったらきつい。
ここにある選択肢は3つ

一つ目、親は死んで年の離れた兄もしくは姉。

二つ目、家族はいないが、親戚がいる

三つ目、正直に話す。

恭二の運命はいかに

戦いはつらい(後書き)

ここで重大な報告。

恭二「どうした？」

実は、たまたま決めたタイトルがかぶった。

恭二「はっ、そしてどうした」

こっちが替えることにした。

恭二「そうか、では次回 は新一話になるのか」

そうゆうことです

恭二「次回、最新作、お楽しみに」

ry先生すみませんでした

新一話 増えた(前書き)

すいません。遅くなりました。

学生生活が、忙しかったからです

ではごっご

新一話 増えた

恭二side

「それは大変じゃない。あなたの家族は何やってるの」
「や……やばいよ」。

その時、恭二に電流が走った。

「ごめん。僕の親は、事故で亡くなったんだ……」

「……！ ご、ごめん。私、そんな事も知らないで」

アリサが言った途端、葬式ムードになった。

『マスターがそんな事を言ったからじゃないか』
ネロ黙れ！！、大丈夫だまだ挽回は可能だ

「大丈夫だよ。今は全然悲しくないし、それに兄さん達も居るから
寂しくないよ」
『嘘をつくな』

仕方ないだろ、そうすればどうにかなる

「恭二君ってお兄ちゃんがいるの」

となのほから

「そうだったんですか。良かった」

とすすかから

「もっと、早く言いなさいよ！ べ、別に心配してないんだからと心配しているのがわかるアリサ。」

「ごめん。もっと早く言うべきだったね。」

「恭二君」

「うん？」

なんだろう？いきなりなのはに呼ばれた。

「あのね、恭二君。なのはのお弁当いる？」

ピューー、ドカーン。プオーン、プオーン

なぜだろ、後ろ（男子）で空襲があった気がする。

「なぜだ、転校生だけあんな扱いなんだ」

「父さん、母さんのバカアアア」

「さあ、お前の罪を数えろ」

お前らなに言っているんだ

「ありがとう、もろっふ」

となのはのお弁当のサンドイッチをもらった

「もきゅ、もきゅ、ゴックン」

「ゴハッ！！」

うわ！、いきなりクラス（一緒に食べてるメンバー以外）がちを吐いて倒れた。

「な・・・ん・・・て可愛い生き物なの！」

「頭がいい上に可愛いって反則だ・・・ろ」パタ
タ・タイシヨオオオ！！！！

「やつは化け物か！！！！」

なんか皆がつぶやいていた。最後のやつは前に出る！！！！ぶっ飛ばしてやる

「お・・・」

「お？」

なんだ、なのはのやつ

「お持ち帰りいいいい！！！！」

「にゃあ！？」

つい変な声が出た。

ただどちがくなくない、声優ネタじゃないよ

「はうー、かあいいよー」

「た・・・たすけて」

頼みのアリサ達は…

「……………／／」

二人ともかおを赤くそめ、鼻を抑えていた

Oh…

『ふはあああああ』

ネロは爆笑していた。

糞野郎

そのあと先生が来るとクラス（なのはと俺以外）が血を吐いて倒れているのを発見し、病院に運ばれていったのは、別の話。

のちにこの事件後、恭二がマスコットになったのは言うまでもない。

side out

なのは s i d e

ふええ！？

なんで私病院にいるの！！！！

「大丈夫ですか高町さん。」

「あのすいません。なんで私がここにいるの？」

「ああ、それは…」「それは僕がはなします」「はい分かりました。」

恭二君が会話にはいつていたの

「さあ帰ろつなのはちゃん。アリサちゃんとすずかちゃんが心配してたよ」

「分かったの。」

私は病院をあとにしました。

「もう、遅いわよなのは。待ちくたびれたじゃない」

とアリサちゃんに怒られた

「にゃはは、ごめんなさい。」

「アリサちゃん、まだ五分しか立ってないよ」

少し会話した後、翠屋で恭二君の編入パーティーをする事になったの
そして、恭二君のお兄さん達もよんだらとアリサちゃんが言ったら、
汗をたらした恭二君がすぐに呼んでくるっていちゃったの

その帰り途中、

(た・す・け・て)

「!!!!」

突然声がした。

「アリサちゃん、すずかちゃん、今何か声がしなかった?」

「聞けえなかつたけど・・・」

「なのはちゃん、どうしたの?」

すずかちゃんもアリサちゃんも聞こえなかつたみたい。気のせいかな?

(た・す・け・てください)

また聞こえた。

私はその声ができるほうに走った。そこには・・・
「すずかちゃん、アリサちゃん」

「どうしたのなのは、いきなりっ!!!!、すずか、119番に」

「わ、分かった」

すずかちゃんが連絡したが

「アリサちゃん、この子が息をしなくなった」

それを聞いて、すずかちゃんとアリサちゃんがかたまった。

side out

恭二side

今俺は、元の道に戻っている。

「翠屋ってどこだっけ？」

忘れました

『そんな事を言ってる場合かマスター』

そんな事をしている場合じゃないから走ってんだよ

「この子が、この子
ん？」

今なのは声が

と聞こえる先にはなのは達といかにも死にそうなフェレットが・・・

「どうしたんだ？」

「ふええ！？」

「「ぎゃああああ！！！！！」」

となのは達におとろかれたorz

「どうぞせ、空気ですよ」

「こめんね、きょんくん」

あれ？聞いたことある名前が

「僕のこと？」

「うん！ じゃなくてこの子が死にそうなの」

「そうか・・・あつ、そういえば、確かここに、あつた！あとは

こいつに飲ませば

「キユウ？」

「「あつ、生き返った」」

まだ死んで無いけどね。

と応急処置をして病院に運ばれてたフェレットは一命をとりとめ、
なのは家で飼うことになった。

そのあと、パーティーして、なのははジュエルシードを手に入れ、
いきなり温泉に行こうと言われて、なのは達に「一緒に入ろうか」
と言われたので、代わりにフェレット（ユーノ君又は淫獣）を明け
渡した。

そして、温泉での戦い・・・

「へ、蛇いいいい！...！」

と言ってなのはは気絶した。

「全く世話のかかるよ、クリー、セットアップ」
『やっと俺の出番か、燃えてきたぜ』

『まだ私もでたいのだが』

すまんネロ、お前はあとでだ

そして、俺はテンカワ・アキトの姿で黒い甲冑、赤いコートに
つまれた。

「クリー、トリックスター」

『分かったぜ、トリックスターセット』
そうすると手に光る籠手と具足。

これこそ、最速のスタイル。ナックルモードのトリックスター。

s i d e o u t

なのはs i d e

「なのは————!!!」

聞いたことある声がした。確かあの時の……

～回想～

私は神社で暴走した、ジュエルシードと戦い負けそうになっていた。

「なのはー！ー！ー！！！」

ユ一ノ君が叫んでいたが

「うっう（ごめんねみんな、もう駄目だよ。お母さん、お父さん）
ごめんなさいさい。」

《誤っている暇があるなら、右に避ける》

「えっ！」

その言葉どおりよけると、ジュエルシードに利用された犬が吹き飛んだ。

「大丈夫か？」

声をかけられたほうを見ると男の人がたっていた。

「大丈夫か、立てないならじっとしている。」

「は、はい」

なぜかその言葉に従ってしまった。
まるで、あの男の子のように・・・

「ネロ、ガンスリンガーをフルドライブ」

『承知したマスター。時間は』

「一分でいい」

男の人は、デバイスと会話していた。

『Ready・Go!!!』

と声と同時に彼はとんだ

恭sideプチ

『Ready・Go!!!』

ネロの声と同時に、俺は跳び、そして、ダンテの相棒のエボニー＆アイボニーをダンテ並みのはやさで撃ち、つきにコヨーテで至近距離で吹き飛ばし、最後にパンドラのバズーカ？っ決めた。

side out
your side

すごい、ジュエルシードのに取りつかるただけど、一瞬で片付けるなんて

なのはも封印が終わったみたい。

「あの、すいません。あなたの名前は何ですか」と質問すると、

「ゼロ・・・」

ゼロって言うらしい。
不思議な人だったな

side out

恭二side

「大丈夫か、なのは」

「はい・・・／＼」

大丈夫みたいだ。

顔が赤いが、大丈夫か？

『やっぱり青いねーマスターは』

なに言ってるんだこいつ

フェイトもボロボロだし助けるか。

「横槍を入れさせてもらう」

「なんだいあんた、私たちの邪魔するならそうはせないよ」

アルフだっけ、うるさいなー

「そうなるかもしれん。あいつは俺が倒す。
クリー、ソードマスター」

『了解だぜマスター』

そうすると、籠手と具足が消え、代わりに背中に3本の大剣、と一本の日本刀、これが、スタイル、ソードマスター

「さて、三枚に下ろす。」

まず、レッドクインでイクシードをため、一刀両断し、次にアストラルで切りさいた。三枚に

「ジュエルシード、封印」

あらー、やっぱりフェイトが回収するのか。

結局、なのはは、フェイトの名前しかけなかった

俺はいち早く戻り、なのは捜索隊に入った。そして見つけた。

「なのはちゃん、見つけた」

「にゃあー、きょんくん。」

なのはは驚いたが、顔に秘密隠してるって顔だった。

「何かあったの？」

分かってるが、

「うづん、なんでもないよ」

「嘘だ。顔に書いてある」

「ふええ！？ そうなの」
驚きすぎだ

「だめだよ隠し事は、まあ、話すまでまつが」

「うん、ありがとう。」

そして帰ったなのは、アリサ達に怒るれ、俺が、フェレットが逃げたから探していたらしいとユーノに押し付け、そして、俺の布団に潜り込んだのはだが、アリサとすずかに見つかり、説教をくらい、俺は恭也と土郎さんに追いかけられ散々な目にあった。

新一話 増えた(後書き)

ぐだぐだだー

恭二「ぶざけるなー!!!」

ギヤアアアア!!!

恭二「全くぶざげやがって
とゆうことで新キャラ紹介」

デバイス

名前：ネロ

声優：諏訪部順一

形：赤い宝石のペンダント

恭二が使うデバイス。

すごくFateのアーチャーに似ている。

恭二の奮闘で人間体、霊体になれる。霊体になれるのは、奇襲をかけるため、あくまで実体化するのに使う魔力をなくすため、気づかれにくいから

ネロ人間体

名前：井伊神 士郎

年齢：23

声優：諏訪部順一

身長：187cm

体重：78kg

好きなこと：家事全般、ガラクタイじり

ネロの人間体。

名前が士郎なのは、恭二が、これがいいと押したたためである
ちなみに、クリーとは犬猿の仲

デバイス

名前：クリー

声：神奈延年

形：時計

恭二が作った、第二のデバイス。

すごくFateのランサーに似ている
恭二の奮闘で人間体、霊体になれる。霊体になれるのは、奇襲をか
けるため、あくまで実体化するのに使う魔力をなくすため、気づ
かれにくい

クリー人間体

名前：クー・イ・ホーリン

年齢：24

声：神奈延年

身長：185cm

体重：70kg

好きなこと：釣り、素潜り、山登り、ナンパ

クリーの人間体。

いつもは釣りばかりしている

ネロとは犬猿の仲

デバイス

名前：EX イクス

形：眼鏡

恭二が作った第三のデバイス。

これはただ機能を入れただけなものだが、うえの二つより高性能で、ライダーベルトと各ガンダムのデータを収納している（二つも同じだが）

なぜ作った理由は、二つのデバイスがないときの代わり。

その代わり、武装は、リベリオンとブルーローズ、ベオウルフだけである

恭二「なんかおかしくない？」

気にするな。さて、今回は、

「ついにKYをボコる日が来たと思ったら、なんと同じマンションにまさかのあの二人が

次回、KY殲滅作戦

「この一撃で極める」

では、（＾　＾）ノ

消失と昔話とk y 殲滅作戦（前書き）

遅くなってすいません

ではどうも

消失と昔話とkY殲滅作戦

神（笑）side

久しぶりに登場できたわい。

「恭二のやつ、ほかの奴と同じように無双じゃな」

「そうだね・・・オーディン様」

「全く詰まらん！あと、ヴァール、こんな所でサボっておらんで仕事せい！あの三姉妹から聞いたぞ。最近、サボって恭二の観察ばかりじゃと」

「うゝ！！！」

何故ばれたのかしら？

「まる聞こえじゃよ、そりゃあ、長い付き合いだからじゃからないか？」

ほほほ、若いつていいの

「かつてによまないください。あと、今さっき面白くする方法考えましたわ」

確かにヴァールの意見は面白かったの、さあ試してみるか…

オーディンside out

恭二side

「さあ、二人ともできたぞ、貴様等が取ってきた食材で作ったフルコースだ。」

ノコスナヨ」

「……………!!!」ゴクリ

どうしてだろう、生きて居られる気がしないや

そう今は昼食の時間、そして目の前にをいてある食べ物がすごく力オスで、出来を言えば上出来なのだろうがおれの目にはダークマター（暗黒物質）にしか見えない。

「さあ恭二、俺が手によりをかけたんだ・・・ノコスナヨ」

なんてことをしたんだろう。

それは、さっきのことである。

俺とクリーは別荘改にいた。

一応説明するが、何が違うかと言うとまず、ワールドがあること、ワールドは何十種類もあること、つぎにそのワールドごとに生態系、文化（人又はそれに準ずる何か）が作られている。

そして今は、

「せい！」

トリコのワールドで無差別に攻撃していた。

理由は簡単だ、いきなり稀少能力の前面装甲の消失し、しかもデバイスに入れていた機体、ライダーのデータが抹消されていた。おかげでつらい戦いだった。

そしてさつき、女神（笑）から電話があり

〜回想〜

ちっ、なぜだ。なぜライダーになれん!!!

苛立ちが起きる。そうしてないとやってらんないぐらいに

「マスター、電話にでてくれ」

ネロに言われて電話にでた

「はあゝい、元気にしてるかな？」

みんなの女神、ヴァールちゃんだよ」

ああ、女神（笑）から電話がかかってきた

「ひどいキョン君。なのはちゃんとかには優しくするのに、女神様ないちゃうよ?」

「で、要件は何ですか?」

「も〜ノリがわるいわね# まあいいわ、要件は一つ、あなた変わったことがない?」

変わったこと?何か・・・あつた!!!

「まさか、俺の稀少能力が消失したのは!」

「そう、神様だよ」

「おい女神、俺を奴のところにつれてけ」

そして、電話で少し O H A N A S H I した

〜回想終了〜

そうゆうことがあり、八つ当たりで狩っていたら、食材のことを忘れており現在に至る。

「ホラ食べろ」

!!!、ネロが料理を持って近付いてきた!!!　ピピピピピピ

「何だ、この音は!」

た、助かった

「じゃあネロ、クリー。そろそろ時間だから。

じゃねー」

「待て旦那、俺も」 「サア、食べろ」 や、やめてくれ、旦那の裏切り者オオオオオオオ!!!!!!!!!」

じゃあなクリー、君のことはわすれないよ。

さっき、一つの流れ星がみえた。あいつ無茶しやがって(笑)

「目的地到着。さあいい、」 「ピューー」 なにかお・・・隕石がきた
ー!?!」

そして直撃。

????にて、

う・・・ここは？

「気付いたか？」

どうせ聞こえるなら・・・、

神様（笑）ここはどこだ

「（笑）をつけるな。ここは神の部屋じゃ」

神（笑）の部屋？

「（笑）とかつけるんじゃない！ 何回も言うなら転生許可を取り消すぞい」

転生許可？何それ

「転生許可というのはじゃな、要するに転生してもいいかってことじゃ。そして、神の部屋はそいつらと決まったものしかはいれん。だからここは面談する場所じゃ」

「だから、真っ白なのよ」

(;)

いきなり女神(笑)がきた
で戻すと、聞きだいたいことがある

「なんじゃ」

なぜ、前面装甲を取り消した。

「それはヴァールが言い出したことじゃ」

「ひどい、神様がつまらないとか、言ったからじゃない」

結局、二人のせいですか。

あと、欲しいものがあります。

「なんじゃ、稀少能力とかは無理じゃよ。」

それ以外ですよ

「なんじゃ、それはものか？」

いや、2つあって両方とも体強化するだけです

「ならよい、なら申せ」

「恭ちゃんも強欲だな」

そうですね。では……

覇気と……スパイダの血をください。

「……!!!」

いきなり空気が凍った。そして、二人は驚きの表情が隠せない。

「・・・理由を聞こう」

そして、神がその重い口を開いた。

「理由は、俺が魔具を持っているからです」

「「・・・！！！！」」

また同じ空気になり、そして神が驚きの表情を隠せない。だが、俺は理由を言う。

「俺はDMCが好きで魔具に手をつけました。

だから、可能性であります。悪魔が侵略に来るかも知れませんが、そして、あそこは、大気に魔力があります。

だから、悪魔には悪魔をと思いました。そして、神の図書館で確信にいたり、悪魔の血を入れれば、人間でも魔神化が出来ますが強靱な力に耐えられなくなり人間が悪魔になる。だが、俺は転生者で超人でもあります」

「ちょっとまで、それは分からんじやろ」黙って聞いてください
「・・・！」

「すぐにつてことにはしません。

ヤバくなった時に体に入れますが、それまではデバイスEXに入れておくことによって、魔人化は出来ますが、人ならざる力なため、覇気も使うことにしました。」

神様と女神様の顔を見るとすごく迷っていた。

無理もない、こんな無茶なお願いをしたんだからな

「恭二よ、貴様は神性があり、当然神性もある。なのにそれを手放すか？」

神性？確か、神になるための素質だったきがする

「当然じゃ、貴様は神と人間の間生まれた子なのじゃから」

「!!!!」

絶句した。俺が神と人間の間子供

確かに考えて見れば、不思議ではない。

だが、俺は・・・

「なら、神力の使い方を教えてください。

あと、頼んだものを」

「バカなのか恭ちゃんは!!!!

神様になるチャンス捨てるって言うの」

女神様が怒っていた

「はい、神なんて興味どころか、そんなものに意味がないです。

例え神になれたとしても、他のやつは魅力的かもしれないが、俺は所詮神に操れる人間です。

ただ、神力を持つ人間であるだけでそれだけの存在何です。」

「なら何じゃ、恩を仇で返すつもりか恭二よ」

「いや、そんなつもりはありません。

むしろ感謝しています。あなたのお陰で今、みんなを守れる力ガ手

には入ったのですから」

そして沈黙

・ ・ ・

「はっはあああああ、ふう、ははあああああ」

「うふふ」

そして、沈黙を破ったのは神様だった。

「いや恭二、主がそんなことを言うとは思わなかった。

よし分かった、ただし、時間はもらうぞ」

「どのくらいですか？」

「うん、どのくらいがいいじゃろう？」

「ヴィール、いいところはないじゃろうか？」

「だったら、神様。

クロノが現れる頃でいいんじゃないでしょうか？　そして、フェイトを隣の部屋で」

それはやめてくれないでしょうか
さすがにきつい

「よし、乗った」

おい、やめてくれくれ神様

「ダメじゃよ恭二、そんなぐらいいしないな」
くっ、勝てないや

「分かりました。条件を呑みますから」

「そこなくてはな。
じゃいくぞ」

そして、神様が呪文を唱えると体が熱くなり、そして、体に力が感じ取れた。

「今、覇気を入れ、神力の枷を取った。

さすがに神力は安全じゃか、慣れてないときついから覚悟せい」

「ありがとうございます。

あとは帰ります」

「そうか、ならあつちに迎えば帰れるぞ」

そうゆうと、いきなりゲートができた。

「ではまたな、恭二「神様」なんじゃ」

「あと良ければ席をあけといたくれませんか。魔人神として」

「全く人間と言う奴は」

「神様、人間は強欲な生き物です」

そして、俺はゲートに向かって進む、あいつらの所へ・・・

消失と昔話とk y殲滅作戦（後書き）

恭二「ダメダメだな」

悪いこれしかなかった

恭二「酸欠帝様、博多様ありがとうございます。」
博多様は「ご指摘ありがとうございます」

恭二「結局、クロノを仕留められなかった」

次回があるさ、次回予告逝ってみよう

恭二「神から力をもらった恭二、今度こそクロノを仕留める

次回、学校とトラブルとクロノを倒せ！！！」

お楽しみください

何となく(前書き)

何となく主人公の説明を試してみました。

何となく

井伊神 恭二 (いいがみきょうじ)

年齢… 20 無印編なので9歳

身長… 138?

体重… 35?

容姿… 黒髪のダンテ

好きな物… ギャンブル全般/家事全般/釣り/ボーリング/ストロベリーサンデー

嫌いな物… 勉強/指図するやつ/悪魔/うざいやつ

稀少能力… 神の図書館

神がドジって、死んでしまいいりりカルの世界に転生した。実は、神と人の間に生まれた子であり神性と神力がある

戦闘で使うスキルが

神力

魔人化

リンカーコアの疑似化

スタイル

神力：ある程度をすることができるが、力が上がったたり下がったりはしない。
だが、

神性を持つ物でも神力を持っているものは5割で使えるものは一握りである。

例：サーヴァントの召喚

リンカーコアの疑似化：神力を使って、色々なシステムに変えること。

だが、強い力（次元連結システムで、メイオウ攻撃など）を使うとリンカーコアが破損してしまう恐れがある（リンカーコアは再生はする）

魔人化（通称DT）：スパイダの血によって悪魔の力を開放することで“魔人化”する。この状態では戦闘力含め全体的な能力が上がり、使用時は傷が徐々に回復する。技はより強力なものに変化し、その他様々な恩恵が得られる。

そして主人公は背後に青白く光る魔人が出現させることもでき、自身が魔人になることもできる。しかし、自身が魔人になることがいやなため、背後に青白く光る魔人が出現させることが多い。

スタイル：そのようなスタイルによって特性が違い、主人公がよく使うスキル。

スタイルに決まった武器しか使えなかったが、スパイダの血によってオールスタイルが使い、好きなスタイルで好きな武器を使えるようになった。

スタイル一覧

トリックスター

移動力に特化したスタイル。敵の近くに瞬間移動するエアトリックやウォールハイク（壁走り）等の動きで敵を翻弄する。

ソードマスター

近接攻撃（特に剣）に特化したスタイル。近接武器それぞれに固有のスタイルアクションが用意がある

ガンスリンガー

遠距離攻撃（銃）に特化したスタイル。銃器それぞれに固有のスタイルアクションが用意している

ロイヤルガード

防御とカウンターに特化したスタイル。敵の攻撃をガードしてダメージを軽減しエネルギーを溜める「ブロック& amp; チャージ」と、溜めたエネルギーを放出し敵を攻撃する「リリース」が基本のスタイル

ダークスレイヤー

敵の前方・上方・下方（地上だと後方）へ瞬時に移動し一気に間合いを詰める事ができる

主人公は武器として魔具を使用する

魔具一覧

アラストル

マレット島城内の扉に封印されている、雷の力を宿す魔剣。通常でも速度上昇・飛翔能力・電撃攻撃などが使えるようになる。因みにアラストルとスパードは盟友であったとされている。

イフリート

マレット島に封印されている炎の力を宿す籠手。隙は大きいが全ての武器の中で最強の攻撃力を持つ。周囲を燃やし尽くすインフェルノなどが使えるようになる。イフリートもアラストルと同様にスパードと盟友であったらしい

フォースエッジ

ダンテの父である伝説の魔剣士スパードが所有し魔界を封じるのに用いた剣の一つ。剣首に髑髏の意匠がある両刃の長剣

三氷棍ケルベロス

氷の力を宿した三節のヌンチャク。リーチが短いが攻撃速度と手数が多い。

元の悪魔はテメンニグルの番人を勤める三つ首の巨犬

・炎風剣アグニ&ルドラ

炎と風の力を宿した双子の双剣。柄の部分に顔がある。やや癖はあるが範囲が広い。

首のない鬼に振るわれているが、剣の方が本体である。

自分を倒したダンテの力量を認め、「喋らないこと」を条件に使ってもらったことに

雷刃ネヴァン

雷の力を宿した鎌。

エレキギターのように掻き鳴らすことで雷を纏ったコウモリを喚び出し、それを飛ばす攻撃がメインの特殊な武器。

一応鎌としても使える。

元の悪魔はコウモリを纏った半裸の魔女。

スパイダのことも知っているらしく『ハンサムな男』と称していた。

閃光装具ベオウルフ

光の力を宿した籠手と具足。

最強の威力を誇るがリーチは短く基本的にタイムマン用。

元の悪魔は小さな羽を生やした獣人。

スパイダを逆賊として憎んでおり、息子であるダンテに襲いかかるも目を潰されて敗走。

臭いを頼りにバージルに挑むも、首を落とされて顔を四等分されて絶命。魂を奪われて魔具にされた

ギルガメス

所有者に取り付いて身体を硬質化する魔界の金属。

ルシフェル

魔力の剣を無限に生み出し、爆発させるトリッキーな武器。

リベリオン

初期装備の大剣。「反逆」の名を持ち、以降ダンテ愛用の剣として登場するスパイダの形見の一つ。魔の属性（無属性）

レッドクイーン

通常の細身の刀身を分厚い曲刀に換装した大剣。柄の近くにあるバイクのアクセルのようなバーを捻る事で噴射剤が作動する。無理な強化をした推進剤噴射機構は、時折巨大な火炎を噴き、これが銘の由来となった
そして、主人公の魔改造によってベルカ式カートリッジシステムに似たシステムを積んでいる

閻魔刀

父スパイダの形見でもあるバジル愛用の閻属性の日本刀。「人と魔を分かつ」とも、「閻を切り裂き食らい尽くす」とも言われている刀

遠距離武器

エボニー&アイボリー

ダンテが自作、愛用している白と黒の大型二丁拳銃。ピアノの「黒鍵」「白鍵」を意味し、側面に鍵盤の模様が刻まれている。

コヨーテ・A

最初から所持している対悪魔用に調整された水平二連型散弾銃。

グレネードガン

回転弾倉を備えるリボルビングランチャー。空中で撃つ事はできず速射性能も無いに等しいが、高い威力を持つ。

ナイトメア

左腕を覆う形で装備される、強力なエネルギー弾を放つ魔界の武器。魔帝がナイトメアの2号機として製作したとされている。発射の度に魔力を消費する。

ルーチエ&オンブラ

スパイダが自ら作ったとされている大型二丁拳銃の名前。それぞれイタリア語で「光」「影」を意味する。「The Legend of ry Dark Knight」を選択すると使用可能。エボニー&アイボリーと性能は変わらない。

幻影剣（DT時のみ）

主人公の周囲を浮遊する、魔力で生成された浅葱色の飛剣。ダンテの遠距離武器と異なり、近接武器の攻撃に混ぜて使用可能

アルテミス

（Artemis）

塔内に封印されていた、魔力の矢を大量に放出する魔界の銃。複数の敵を同時に攻撃できる。

スパイラル

（Spiral）

連射は出来ないが、長射程と高い貫通力を持つ対戦車ライフル

カリナアン

（Kalina Ann）

レディの母親の名を冠するフックショット付きのロケットランチャ

1。連射はできず射程距離も短い、高い攻撃力と攻撃範囲を持つ。その他、敵を引き寄せるフックショット（グラップル）、後部からのマイクロミサイル（ヒステリック）など、多機能な重火器である

ブルーローズ

（Blue Rose）

既存の銃を自作改造した六連装大口径リボルバー。片手撃ちで一発の威力はやや高いが連射性能はエボニー&アイボリーに比べて低い。近代兵器である「銃」は魔剣教団では卑しいものとされている為、教団内で銃を使用するのはネロだけである。バレルを無理矢理二つ備えさせてあり、既に原型は留めておらず元となった銃が何であるのかは判別不可能。縦に並設されている2本のバレルから数十分の1秒という誤差で種類の異なる二発の弾丸を発射する。先の一発目で敵の体表を大きく傷つけ、同じ箇所の間髪を入れず着弾した貫通力の高い二発目が敵体内に直接ダメージを与えるという設計思想に基づいており、硬い外装を持つ悪魔に対しても効果的にダメージを与えられる魔力を銃に込めることでより強力な溜め撃ちが出来る最大三段階までチャージ可能。二段階目では敵を燃焼させ、三段階目では敵に命中した後、時間差で敵が爆発による追加ダメージを受ける。この際攻撃に炎属性が付き、一部の敵に与えるダメージが増加する。

災厄兵器パンドラ

（Pandora）

スリッケースの形の魔界兵器。災いを封じたパンドラの箱のように、数多くの武器に変形し、破壊をまき散らす

何となく(後書き)

＼
(
^
^
)
/

色んなこと（前書き）

言いたいことがあります。

今回から、作者が自己中で書きます。

つまらない作品だと思うなら、読まないでください
では、どうぞ

色んなこと

作者 side

今、恭二は別荘改のハイパークロックアップモードで特訓中です。ハイパークロックアップモード？とは何か順々に説明します。

別荘改は、通常モードとアクセルモード、クロックアップモード、ハイパークロックアップモードが存在します。

通常モードは、中での1日は外での一時間です、アクセルモードは30分、クロックアップモードは一分、ハイパークロックアップモードは一秒になりますが、外との時差が大きくなるに体があわせようとして、体にダメージがあります。

例をあげるとFate/Zeroの衛宮切嗣が使う使用後に精神と肉体に負荷がかかるものの、自らの時間流を加速・減速させて通常の数倍の運動能力や時間遅延による状況の先延ばしを得る「固有時制御」と同じです。

恭二があまり使うのは嫌うのですが、クロノくんが出る時間が30分なので使用しています。

では今からユーノ君に代わります。

ではただ、説明し忘れて今説明した作者でした。

なのは side

学校の帰り、今日はキヨン君は学校を休みました。先生に聞くと風邪と言っていました。

(キヨン君、大丈夫かな?)

少しキヨン君が心配になりました。
そして、曲がり角でユーノ君と会いました。首には…レイジングハ
ートがありました。

「レイジングハート、直ったんだねよかった」

『ありがとうございます。もう大丈夫です』

よかった。レイジングハートが直ってくれて

「また、一緒に頑張ってくれる？」

『もちろんです。マスター』

その言葉を聞いて、私は友達が帰って着たかのように胸にあてた。

「ありがとう」

レイジングハート

「……!!!!」

公園の方からジュエルシードの反応があった。

急いで向かうとジュエルシードが木に取り付いていた。

「封時結界、展開！」

ユーノ君が結界を張った瞬間、いきなり魔導弾が飛んできたが

「ウオオオオオオオオ!!!」

ジュエルシードに取り付かれた木（以降D木）がバリアーを張ってきかなかった。

「もお、生意気にバリアーまで張るのかい」

「今までのより強いね。それにあの子もいる」

その声の方向を見ると、フエイトちゃんがいた。そのことに気をとられた時、D木が根で攻撃を仕掛けていた。

「ユーノ君、逃げて!」

ユーノ君はすぐ茂みに隠れた。

そうすると、D木の根で攻撃してきた。

『Flier Fin』

レイジングハートが唱えると、靴に羽が生え、それをよけた。

「飛んでレイジングハート、もっと高く」

『分かりました』

そうして私は、D木より高く上がった。

「アークセイバー、いくよバルディシュ」

『アークセイバー』

そしてフェイトちゃんは、バルディシュを構えた。

『シューティングモード』

「いくよレイジングハート」

そして、フェイトちゃんが木の根を切った。

「撃ち抜いて　　デイバイン！」

『Buster!』

「貫け轟雷！」

『Thunder smasher!』

攻撃はあつたけど、後少し足りない!?

「その隙、逃さん」

!?!!

「くられ必殺の、スパイラルウウウ・シエイバアアア!?!!」

その方向を見ると、なんとゼロさんがいた

そして、ゼロさんが腕から赤黒い槍?みたいなのを放ちました。

やっぱり、ゼロさんはすごいな

恭二 side

「スパイラルウウウ・シエイバアアア!!!」

そして、別荘改で生み出した必殺技、スパイラル・シエイバ。それは、ギルガメスの籠手に魔力を凝縮し槍上に放つ衝撃波みたいな物である。

が危なかった、後少し遅れたら使用出来なかった。

二人とも唾然していた。

「二人とも何をしている。早く封印しろ!」

「「あつ……!!!」」

今頃気づいたのかよorz

二人は杖を構えて

『Sealing mode? Set up!』

『Sealing form, set up』

「ジュエルシード、シリアル7」

「封印」

二人のおかげで、ジュエルシードを封印に成功した。

後はどう回収するかだ。やっぱり、ダークスレイヤーとクイックシルバーがらくかな?

と考える内にフェイトとなのはが、ジュエルシールドをまたいで向かい合っていた。

まっ、まさか！？ぶつかり合いあうの馬鹿なのあの人達
予想道理ぶつかるうとしていた。

「なっ…、馬鹿！！！」

そして、二人がぶつかった時、その中心で魔法陣が展開されていた。

そこからは、二人の杖を止めた少年、クロノがいた。

「ストップだ！　ここでの戦闘は危険過ぎる。」

「・・・」

フェイトが啞然としてる

「時空管理執務官クロノ・ハラオウンだ。

詳しい事情を聞かせて貰おうか」

うわー、よくもなんなにいえるもんだありえねー

「おい、そこにいるやつに、君も聞かせて貰おうか」

ブツチーン

何だこの野郎、そんな事してるから色んな所で変なあだ名や、
疲労ができるんだよ。

ああ、いいし、そんな事言つなら殺あああつて殺るぜ！！！！

「ああ、何だと糞ガキ、年上には敬語を使って敬えつて親か先生から習わなかった。」

もし、習ってないなら、そいつらは糞で、馬鹿で、上官の指示に従えないダメ人間なようだな」

カチーン

え？なんか寒気がする。 気のせいかな。 後フェイト達が軽く引いてる。

「貴様、ふざけるな。」

「何キレてるの？バカなの、アホなの、死ぬの？それとも凶星ですか？お前の親と、お前を教え子にしたやつを見てみたいわ」

「侮辱するのもいい加減にしろ。」

このまま、終わらない気がする。

「へっザマ（おーい、聞こえてる。フェイトとその他）」

クロノとの話は、おいといて

「（あの…何ですか）」

「（さっさと離脱したら？）」

「（え…？大丈夫ですか）」

「（気にするな。この手の相手は慣れている）」

「（すいません。お願いできますか？）」

「（楽勝、楽勝、さっさと行きな）」

「(はい)」

そして、フェイトとの念話を終了させる

「フェイト、ひくよ」

「うん」

アルフと一緒に魔法弾でクロノに攻撃するが、防がれていた。

「まっ待て！」

待つことをせず、フェイト達は転移した。

クロノはキレてたが、なのはは

「私はただ、フェイトちゃんとお話したいだけなのに」

と呟いていた。

「さて、俺も帰りますか」

「待て、君には聞きたいことが」

あ、ジュエルシードを、わわわ忘れ物」

「タイムラグ」

指を鳴らした瞬間、周りが、白の世界に包まれる。

スタイルクイックシルバー

時の流れを操るスタイルで、使えるスタイルアクションは「タイム

ラグ」の一種類のみ。自身を除く全てがスローモーションになり、画面全体が白系の色に染まる
ダントは十秒だけだが俺は、別荘改で鍛えたため一時間も持つようになった。

それで俺は、ジュエルシードを取ると、タイムラグを解いた。

「クロノ執務官、これは何でしょうか？」

と堂々とジュエルシードを見せる。

「貴様、それをどこで「今さっき」なっ…、だが時間はなかったはず、と考えれば、違う所で入手を「なのはちゃん、ジュエルシードのシリアルって何？」勝つてに話すな「にゃああ！？、た、確かシリアル？」「ほら、7番だが」「ぐう」

なんて悲しいやつ

「そいつをこっちに渡すんだ」

「やだ。なんなら、力ずくでもしてみたら」

「貴様は、公務執行妨害で逮捕する」

「さあ、狂ったパーティーの始まりだ」

色んなこと(後書き)

まだ続く

外伝 外伝じゃないけど、私立サーヴァント学園（前書き）

多分、続けるのは難しい作品なので外伝です

では、どうぞ

外伝 外伝じゃないけど、私立サーヴァント学園

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバイ
ンオーグ。」

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至
る三叉路は循環せよ」

ここは、俺の部屋で今は儀式の途中である

「閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じ
よ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

「
Anfang

「
告げる」

「
告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

「！」

瞬間、眩しい光がにつつまれて、光が収まるとそこには

「問おう、君が僕のマスターかい？」

サーヴァントがいた。

自己紹介が遅れた。俺の名前は、村上竜哉。私立サーヴァント学園の高校一年生になる。

サーヴァント学園とは生徒がサーヴァントを従える学校であるだが、この学園には第3退学ルールがある

一、サーヴァントの消滅　ここでは、サーヴァントと一緒に生徒同士で戦闘をしてる

だが、通常では消滅はしないが、異常がある場合のみ消滅するときがある

二、令呪の消滅

令呪とは、絶対命令権をもってサーヴァントを従わせる事を可能とする、マスターの印。マスターになれる魔術師は聖杯によってもたらされた聖痕が予兆として現れる。これが変化して令呪となる。

行動を抑制するのみならず強化するという側面も持ち、基本的にそのサーヴァントには不可能な行動であろうと、それがマスターとサーヴァントの魔力で届く範囲内であるならば令呪の力で命じる事によって実現可能となる。

ただし、命令の適用される期間が長かったり、範囲が広がったりするとその分効果は薄まってしまふ。無論逆なら効果が上がる。よって「全ての言動に絶対服従」などという命令はホトンド無意味と言える。

その令呪が消滅するとサーヴァントとのパスがなくなり、サーヴァントが消滅又はサーヴァントに殺害の可能性がある場合がある

三、赤点を取る事

これは後に言おう

サーヴァントとは何か、聖杯の助けによりマスターに召喚され、彼らに使役されることになった英霊「7」。

本来、英霊として召喚される彼らは意思を持たない純粹な「力」として行使されるが、冬木の聖杯戦争においては、一度の聖杯戦争につきあらかじめ通常7つの器^{クラス}、

・セイバー（剣の騎士） ・アーチャー（弓の騎士）
・ランサー（槍の騎士）

・ライダー（騎乗兵） ・キャスター（魔術師） ・バーサーカー（狂戦士）
・アサシン（暗殺者）が用意される。

彼らの半身ともいえる「宝具」を始めとして現代の人間より遙かに強い力を持った存在であり、さらに本来の力に加えて伝説の知名度や信仰による恩恵を得て力を振るうことが出来る。また、器^{クラス}に収まることで、クラスに応じた固有の技能（剣・弓・槍の三騎士の「対魔力」、狂戦士の「狂化」など）や、その時代や地域、聖杯戦争のシステムに対する知識が与えられている。

だが、サーヴァントも二種ある

デフォルトとオリジナル

デフォルトサーヴァントはうえでいった通りで英霊のことである
オリジナルサーヴァントは、生徒が作ったサーヴァントで、デフォルトサーヴァントよりも圧倒的に弱い
が、召喚の時にそれによって変わりが、クラスと能力を決められることができる

召喚時にそのものに近い物があるとデフォルトサーヴァントに近づくことができる（ステータスが）

そして、俺のサーヴァントもオリジナルである

「マスター、ちょっといいか」

サーヴァントが話かけてきたので、中断しよう

「マスター、私のクラスは何だ」

「ああ、言っただけじゃなかったな。
お前のクラスはアサシンだ」

「アサシンか、確かにそれらしい格好だ」

黒い軽甲冑、青い布、そして、目の付近をを覆い隠しているマスク
確かにアサシンらしい。

「だがなぜだ？オリジナルが何故こんなにステータスが高いんだ」

無駄にハイステータス

「知らんよマスター、君の方が分かるんじゃないか」

知らん

まあいいや、これで準備万全だ
早く休みが終わらないかな

外伝 外伝じゃないけど、私立サーヴァント学園（後書き）

はい、今回はゲストがきています

恭「はい、よろしく」

竜「よろしくお願ひします」

雷「やあ、よろしくな」

恭「なんだお前は」

雷「僕かい、僕は、きどうらいき希堂雷貴
君と同じ転生者さ」

竜「僕だけ転生者じゃないんですね〇——」
そつだよ。まあ一応二人の説明しとくか

竜哉の方

私立サーヴァント学園

生徒が全員魔術師でサーヴァントを持っている世界だ
そしてその学校で聖杯戦争を勝ち抜くと願いを叶えてくれるだと、
妹を救うために少年は戦いに身を寄せる

雷貴の方

自殺したんじゃない、あいつに殺されたんだ
未練を残して死んだ主人公希堂雷貴

そこに現れたのは伝説の神々達、え、何、もしにやつを殺したいなら、試練に乗り越えろ。
そういわれ転生者となった。
あいつを殺したいから生き抜く

はい、案内終了

恭「なんか大変だなこのふたり」

竜「うん、妹を救うためなら人だって殺せる」

恭・雷「（こ・・・こいつシスコンだ）」

てか、雷貴も大変だ

雷「ああ、やつを殺すまではしねん」

恭「（こいつら絶対ヤバいって）」

では、竜哉のステータスを見てみよう

名前：村上竜哉

身長：175?

体重：65?

好きな物：ワカメ（慎二）いじり、パソコン、本、コーヒー、香奈
嫌いな物：偽善者（衛宮を一応除く）、遠坂、アインツンベルン、

慎二のじいさん、医者

魔術の属性…物

慎二と衛宮とは親友でいつも慎二をいじって、衛宮が止めるがいつものパターン。

だが、両親とは他界、妹は入院中、衛宮達には「妹は病弱で、両親は、交通事故」と言っているが実際は違う模様、何故か アイントゥベルン・遠坂・マキリの三家を恨んでいる

竜「あれ、アサシンは」

すいませんそれはまた今度

恭「だからだめなんだよ」

雷「そうそう」

う…何故か、心にゲイ・ボルグが

恭「じゃあこれで閉めますか」

竜「ですね」

雷「だね」

恭・竜・雷「また来週」

すいません。また思いついたらやります

外伝 外伝と言つ息抜き復讐の黒い闇と命(前書き)

今回も次回予告 ?

えっ

そして、俺は光に包まれた。

「うっ!」

今僕は、白い部屋にいた。そこには、ギリシャ神話と北欧神話の神々がいた。

「僕は何故いるんだ」

「少年よ、生きるチャンスをやろう」

そう、目の前の神が言う

「本当ですか!?!」

やつをこの手で

「その代わり、ふさわしいか、試練を受けて貰おう」

「ああ、分かった」

「いいのが、貴様は、今から地獄に落とされ、阿修羅になるのだぞ」

「構わない、やつを、○○を殺れるのなら構わない」

覚悟はできている。

「良からう、なら貴様に力をやろう」

汝は阿修羅となる」

そう、神は言うともまた眩しい光に包まれた。

〈神々の会話〉

「本当にそれで良かったのか、オーディンよ」

「構わん、やつは必要なた存在だ、ゼウス」

「悲しい物だな。人間ならざる物が、復讐にかられるとは」

「ロキよせ、オーディン様だって、やりたくてはやった訳ではない」
「知るか」

「彼を信じるしかない。信じるしかないだ我々には」

そして、雷貴は

目の前は、赤く燃えており、驚きを隠せないでいた。

「ここは、バイオハザードの世界か」

何故か知らんがいきなり思い浮かんできた

「一体なにが」

《雷貴よ》

「なんだ」

《貴様には、色々なことをしておいた》

「色々ってこれか」

そう思っていると、いきなり白と黒の剣、干将・莫耶があった。
いやそれ以前に何故知っているんだ

《それは儂が説明しよう。》

いきなり、悪そうな爺さんが出てきた

《要するに　　ってことだ。》

そうか、それでは納得がいく

「ありがとつな爺さん」

《礼には及ばんよ》

「そうか、また会話するときはどうすればいい」

《簡単だ、また念じるようにすればいい》

「ありがとつ。

では行きますか。やつを殺るために」

そして、俺は地獄に舞い降りた

外伝 外伝と言う息抜き復讐の黒い闇と命（後書き）

あー、終わった、終わった

恭「……………」

どうした？

恭「いや、俺だけかな、なにもなく楽しんでいるの」

竜「いいんじゃないんですか。

戦いも人物も人それぞれだし」

雷「そうですね。みんな同じならつまらないですよ」

本当だ〜

恭「そ…そうだよな。（二人の目がなのは達がO H A N A S
H I I しているときと同じだ…）」
まあ、ということだ雷貴の紹介

名前…希堂雷貴

年齢…25歳（現在の世界）

身長…177？

体重… 66？

自分の世界では自殺とされてるが、実際は違うらしい。
その犯人の顔を見ていたため、神が試練を受けることにした。
本来は、面倒な事はパスする。

ちなみに、

家族… 両親に出掛けた時、トラックが突っ込み、事故死

親友… 自殺

恋人… 目の前で通り魔に刺され死亡

などで、犯人に首を絞められたため、自殺だと思っている

神から貰った能力

デュラララの平和島 静雄と同じ特殊体質

筋力のリミッターが存在しない生来の特異体質で、人間でありながら人外が存在すらも恐怖するほどの『怪物』そのものの圧倒的な力と強さを持ち、自販機や街灯、ガードレールなどを片手で容易くひっこ抜いて投げ飛ばし、車をサッカーボールのように蹴り転がす。静雄の全力の発揮についていけるよう、筋肉や骨、関節が恐ろしく硬く強靭に『進化』していき（新羅曰く「一世代での進化」）、ナイフの刃は5ミリほどしか刺さらず、医療用メスが施術中に何度も折れ、致死性の改造スタンガンをものもしないなど、人間離れした強靭さと回復力を持つ肉体となっている。

投影

Fateに出てくる衛宮士郎達の投影。

ちなみに雷貴は銃器も弾も投影可能。

気

雷貴のオリジナル。

武器の強度を上げたり、自分を強化したりする。Fateの強化に
にているが、強化より使い勝手よく、自分意外のやつもでき、リス
クがない

バックについてる組織

国境なき軍隊

雷貴のポジションは、カズと同じで、特攻隊長あたり。
ボスやカズから、アイテム（食べ物）を貰ったり、アドバイスを貰
ったりする

とのような感じですよ

恭・竜「……………」

雷「どうしたんですか」

恭「いや、君がすごすぎてマジムリデス」

もう文字数ないから

恭・竜・雷「また次回！！！」

外伝 私立サマーヴァンント学園その2 (前書き)

シフト決めました。

外伝 私立サーヴァント学園その2

朝、学校校門前

竜哉「やあ、慎二。君のサーヴァント大丈夫かい。」

ウワアアアアア!!!

慎二（以下ワカメ）「何!!!。舐めるなよ竜哉。今回は俺が聖杯をと」衛宮、お前のクラス何？」なっ、無視するなよ「あ、慎二、竜哉おはよう。」衛宮、お前もかよ。お前も僕を無視するのか」

!!!!

衛宮「いや、そんな気はないよ、慎二」

オレノサーヴァントガアアア!

竜哉「いや、その気は俺だけだ、慎二。」

慎二「そうだな。衛宮みたいな奴が、僕にかなう訳ないからな。」

竜哉「そうだな。だが、まず目の前のサーヴァントからだな」

うん、ぜってーアブねー

「やっきゃえ!!!!、バーサーカー!!!!」

「!!!!」

説明しよう。サーヴァント学園では、初心者潰しが基本なのだ。

そして、今いるのが、二年生のイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。そして、サーヴァントバーサーカーだ。あれは初心者潰しと言うよりも、衛宮を待っている。

何故かってそれは衛宮の親が、アインツベルンを裏切ったためら

しい（噂だが）

イリヤ「あ、お兄ちゃんだ。

やっきやえ！！、バーサーカー」

竜哉「うお！、おいこっちきたぞ。

ワカメ早くどうにかしろ！！天才だろ」

ワカメ「竜哉お前こつゆうときに使うな。」

衛宮「ちっ、仕方ない。こい、セイバー！！！！」

衛宮が叫ぶと、金砂の髪、蒼い衣を纏った騎士が現れた。

セイバー「はあっ！」

ガアアアン！！！！

剣と剣とのぶつかり合い。

だが、セイバーの剣だけが見えない。

アサシン「（マスター、あれは不可視の剣だ）」

竜哉「（マジでそんなのありか？）」

卑怯過ぎないか。いや、衛宮の性格上、誇り高い騎士だろう。

いや、だからこそ、誇り高い騎士のふりかもしれない。

多分、剣が宝具で真名が書いてあるか、それとも誇りが無いやつで、不意打ちタイプかどっちなかな。

竜哉「（あっアサシン。やつらの真名か宝具が分かったか？）」

アサシン「（いや済まない。戦ってみないと解らん。写ってはいるが、一応試したい）」

そして、セイバーとバーサーカーが互角に殺り合っているようだが、セイバーがぎりぎり、押されていた次の瞬間、

セイバー「うわあ！！！！」

衛宮「っ！！、セイバーああああ！！！！」

バーサーカーの剣がセイバーに当たった。多分、セイバーは限界だ。

衛宮「セイバー！」

衛宮がセイバーの方へ走っていった。

だが、バーサーカーはすでに剣を降っており、絶体絶命だ。

竜哉「（仕方ない。）アサシン！！、助太刀するぞ。（アサシン、衛宮達の方へ行け）」

アサシン「分かった。」

そして、アサシンは、セイバー達の方へ行き、槍で防いだ。

イリヤ「ふうん、私とお兄ちゃんの邪魔をするだ。

いいわ、私のバーサーカーいえ、ヘラクレスが相手なのよ」

一同「……！！！！！！」

ヘラクレスだと、確かこの強さならあり得る

イリヤ「やつきゃえ!!!、バーサーカー」

ヘラクレス「!!!!!!!!!!」

バーサーカーがこっちに向かってきた

竜哉「アサシン、衛宮達を頼んだ。(セイバーの真名が分かったか)」

アサシン「了解した(ああ、セイバーの真名は○○だ)」

やっぱりか、ならあれを使う

俺はセイバーの真名を知ったので、ヘラクレスのもとに走る。

「……………!!!!!!」

驚くのも無理もない。

イリヤ「ば、馬鹿じゃないの。

バーサーカー、彼を真つ二つにして」

バーサーカー「!!!!!!!!!!」

衛宮「竜哉あああ!!!!!!」

竜哉「うおおおお!!!!!!」

さつき、アサシンから、セイバーの宝具を聞いた。
ならそれを作る。

竜哉「トレースオン投影開始」

そして、俺はあいつに勝てる武器を生み出す。

「……………!!!」

に二回目の静寂、それもそうだろ。
なぜなら、俺の体が、光っているからだ。

そう、俺はホムンクルスではないが、俺の家族は大喜びだった。

俺の魔術回路が体全身にあるからだ。

最初は、神経に無数のラインがあり、成長するにつれ数が増えた。
今は、筋肉から髪の毛一本までが、ラインになりそして、昔の代で
作られたが、だれにもあわず、俺があってしまった。無数の令呪、
そして、今はマントだが、体全身を埋め続け刻印のかず、それが俺
だ。

今まで、一度も限界まで使った事がない。
が今、全身の回路を使い、良質で強度もある幻想を超えた、本物紛
いに近い何かを作る。

「歴史解明、現在の断りを変えて、創造する」

そして輝く黄金の剣。

セイバー「あれは……」

衛宮「どうしたセイバー」

さすがに見たことはあるだろう。

竜哉「真名開放、選定の剣を力を、勝利すべき黄金の剣」カリバーン

カリバーンでバーサーカーの腕を両断する。

イリヤ「無茶苦茶じゃない。

それは投影でできた偽物なのに……」

竜哉「確かに偽物ですよ。だが、本物に近い偽物です。

例え偽物でも、それにやられるサーヴァントもどうか思いますよ。」

イリヤ「!!!、まあいいわ、行くよバーサーカー。

じゃあねお兄ちゃん」

そして、イリヤ先輩は去っていった。

竜哉「いやあ、大変だった。

だが、その分収穫はあった。」

衛宮「お前は昔からデタラメだな」

慎二「確かに、だが、アサシンか、後ろには気よ付けるよ」

ああ、時間をくつたな〜。

あれ？

竜哉「衛宮、今何時」

衛宮「えーと、！！！！。まずい遅刻だ！！！」

「「ええ〜！！！！」」

そして、僕らは先生達に怒られた。

外伝 私立サーヴァント学園その2（後書き）

いや、大変だった。

そしてシフトのことは、なるべく守りますが、私立サーヴァント学園を火曜日、もう一つを木曜日、そして、本編を日曜日に上げたいと思います。

外伝じゃないとは思いますが、確実に外伝は積みます。

なので、気にせず暖かい目で見てください。

感想、指摘、アイデアを待っています。

それでは、また会えたら会いましょう

外伝 復讐の闇と殺人狂について

今回は、木曜日に更新する予定だった 復讐の闇と殺人狂についてアンケートを取りたいと思います。

内容は、

一、主人公の性格。

二、奴を出すか

についてなんです

ちなみに説明しますと、主人公が復讐の闇で、奴が、殺人狂です。

それで、主人公の性格は、一応候補としては、前世とおなじか、殺人狂にするかです。
それ以外も受け付けます。

二つ目は、奴を出すかは、主人公のライバル的存在とするかです。

締め切りは日曜日にさせていただきます。

意見をお願いします。

せむきと(前書)

軽く死ねる。

せむきと

やるべきこと

恭二 side

「川の、川の」

「ほらほら、全然当たらんぜ」

戦闘開始から10分、今だに俺の方が優勢だ。つか当たり前、クロノはステインガースナイプやら、ブレイズキャノンを使うが、俺は、ステインガースナイプにはコヨーテ・A、ブレイズキャノンにグレラン使ってるから魔力が、少ない。

「はあ、はあ…」

「ああ、もう息切れかよ。・・・仕方ない、トドメでもさすか。」

そして、リベリオンに魔力を集中させる。

『すぐに戦闘をやめなさい』

え？誰だお前

「何だと、先に仕掛けたのはこっちだが、捕まえる（笑）と言われて抵抗しない奴はいないし、それに」

ギャグかますか

『それに、』

「誰あんた？」

ズサーー!!!

一同そうずっこけ

なのは達はあるかも知らないのって見てる。

『私は、そこにいるクロノ・ハラオウンの上司で、彼の母親のリン
デイ・ハラオウンです。
さつきはどうもすみませんでした』

う、すげー怒ってるし、忘れてた。リリカルでは、女性>>>>>
>>男性があつたのを

「そうか、なら息子の躰もするのだな」

そ、そ、そ、そんな事でも、強気に、強気に

とのこともあり、事情聴取のため、アースラに転送しました。
そして、ユーノが人間化して、事情を話し終わりました。

なのはは驚いている様子です

「これよりロストログリア《ジュエルシード》の回収には、時空管理
局が全権を持ちます」

「「えっ……!!!!」」

リンデイ・ハラオウンが言った。

プチッ

抑えるオレ

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って、元通りに暮らすといい」

プチッ、プチッ

タ・・・タエロ

「次元干渉に関わる事件だ。」

これ以上民間人を巻き込むわけにはいかない」

「で・・・でも」

ナノハ、ソノキモチワカルヨ

「（あの、ゼロさん？）」

ユーノカラ念話ガキタ

「（ドウシタ）」

「（もしかしてなんですが、何か怒ってませんか？目の色が単色になってますが）」

「（ナニヲイツテイルンダ、オレハオコツテナイヨ）」
オコツテルワケナイジヤナイカ

「まあ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょうから今夜一晩ゆっくり考えて、それが改めて話をしましょう」

ブーーーーチーーン

ああ、これ以上は無理、仕方ない。

管理局と少し O H A N A S H I が必要な。あとすぐさま奴を呼ぶか

そして、ある呪文を唱える。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバインオーグ。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

「あの、どうしたんですか、いきなり呪文を唱え初めて誰だってビビるよな。」

だが、構っているひまはない

「 Anfang

「 告げる」

「 告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「 誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者。

汝三大の言霊を纏う七天、
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

「……………!!」

いきなりだからビビるよな。
煙の中から大男が出てきたから。

「少しまで、枷とき発動!!」

枷とき、それは、俺がサーヴァント用に作った宝具だ。

ちなみに神力はあり結構高いらしいから、宝具の一つや二つ作れるが、しぬほどだるくなる

説明に戻ろう、枷ときは真名開放すると、サーヴァントの呪いを一つ（デメリット）を消すことができる。

バーサーカーの場合、そのクラスで呼んだため、喋れないが、能力が上がるが、能力が上がるだけになる。

「問おう、貴様が俺のマスターか」

「ああ、一応仮だがな」

で後ろでは、びっくりしていたが、クロノが喋る
「貴様、いきなり召喚魔法とは何をする気だ」

「え、管理局潰し」

「……………!!」

黙るよね普通。

「なぜそんなことをする」

「うるさい餓鬼か貴様は、ユーノとなのははわかってないが、俺達、いや俺はいまか、を利用する気あつただろ」

「何、母さんがする訳ないだろう。」

「だから餓鬼なんだ。

なぜ、お前が関わるなといったのに、また明日話し合う必要がある

！！！」

「「あつ！！！！」」

今頃か

「それは利用する気満々だろ、執務官がこんな餓鬼に務まる訳がない。

だから、AAAのなのを取り込もうと言つこんたんだろ」

「何を言つ、母さんがそんなするわけがない」

「・・・」

たが喋らない

「凶星か」

「すみませんでした。

だから、管理局を潰さないでください」

「無理だな。俺を殺そうと思ったってそうはいかない。

令呪を持って公使する
バーサーカー、俺が死んだら、管理局を潰せ」

「了解した。」

令呪を使った。残り二つ

俺が死んだら、バーサーカーが消えるかって消えないさ。
一応、違うところから魔力を繋いでいるため、関係ない。

「あのゼロさん、さっきのは一体？」

ユーノから

「ああ、令呪とは、こいつを縛る鎖みたいなものさ、だから令呪はこいつらにとって、絶対命令権だから、何したってかわらぬさ」

「さあ、潰しにいくか」

「止めてください。」

「お願いします。」

「ゼロさん、やめてほしいの。」

仕方ない、決めるのは本人だしな

「分かった。ならなのは優しいね、利用されると分かってもやるんだね」

「うん、やっぱり、困っている人がほっとけないの」

そうか、そうかとなのはの頭を微笑み（いい意味で）で撫でる

「!!!／／／」

「ん？、どうした」

「え、いや、なんでもないです（うわわ、近くで見るとかっこいいな／／／」

そうか、なんかあったかと思った（熱）

そんな状態だったら命がない

作者【恭二はものすごい鈍感でかんがよくてもこつち方面は壊滅的で、好きと言われても、友達としてしか感じません】

ん？なんか、バカにされた気がする。

との訳で、なのはは家の人に事情を話した。

ここでの誤算はなのはの兄が、シスコンだったこと

そして今、フェイトが海で戦ってました。

その間は、色々あったが、作者がオーバーヒートなので勘弁させてください。

そして戻ろう。

今フェイトは海で戦っているが、なのは達もいきたそうだが、あほ管理局は捕獲する気らしい。

「（そろそろ魔力が足りないか、結果にサイスのがきれてるし）」

と言う訳で逝きますかね。

俺は転送装置の上に乗った。

「貴様何してる」

「助けに行くんだか何か」

「なぜだ、君も臨時魔導師だ」あつ、違つよ」「なぜ」

「それは、ユーノとなのはただで俺はいただけだが、ふざけるなとか言つなよ、情報提供は勝手にしたんだから。」

そして、俺は転送した。

「おい、大丈夫か」

一応フェイトに声をかけてみた。

「あなたは・・・ゼロ」

良かった。覚えててくれて

「フェイトの邪魔をするな!!」

うん、アルフが突っ込んできた。

だが、ユーノのバリアにふせがれた。

でなのとは言つと、空からおちてきている

「（親方、空から女の子が）」

いや言つてみたかからすつきりした。

「行くよ、レイジングハート。 風は空に、星は天に。輝く光はこの腕に 不屈の心はこの胸に！ レイジングハート セー

ツト・アープ！」

「Stand by...ready!」
なのも準備が終わったみたいだ。

「なのは、フェイト、お前らで封印しろ！あれは俺が殺る」

「え.....」

驚くなって

「早く準備しろ！」

「（魔力をゲッター線に、リンカーコアを適したものに）」

そして手に意識を高め、両腕にゲッターエネルギーを集中させて、巨大なエネルギーの塊を敵にぶつける。

「くらえええ、ストナアアア、サンシャイイイイイン!!!!」

最大質力出はないか、的（敵）が蒸発してジュエルシードだけ残った。

「.....」

みんな啞然としている

「早く封印しないのか」

「は、はい!!!!」

「Shooting mode」

「Sealing form、setup」
封印完了！やったー

今アースラで、

「指示、ルールを守るのは個人、集団を（ry」

説教をされてました。

俺は今立つ+目を開ける+寝るをしてるが何か。

だってまだ、一時間しか寝てないのに説教なんて受けてられるか

「・・・と言う訳で、今回は不問とします。

ですが、二度とこつゆう事のないように」

「は、はい！」

「はあ、はい」

やっと終わった。

「あと、ゼロさん。

クロナをからかわないでください」

あっバレた

「はいはい、次から気を付けるよ」

とな訳で解散、俺はゼロのままなのはと翠屋に向かった。

目的は勿論、ケーキである。

「だだいま！」

「お帰りなのは。

あら、ゼロさんも一緒にしだったのね」

THEカオス！！！！

今、なのは母高町桃子が名前を言った瞬間、士郎さんが、包丁を強く手を止めて、恭也さんは、本を読むのを止めて木刀を持ち始めた。
「（下手したら、リベリオンが、必要かも・・・）」

と死を覚悟したとき、女性陣が動いた。

まず、桃子さんが士郎さんを目で殺り、なのはの姉高町美由希が、恭也さんを鎮圧した。

一つに集めた男性陣（俺とユーノ以外）を

「全力全壊！！」

そしてなのはに大量の魔力が集まる
まさか

「ユーノ！！！！。今すぐ結界をはれええ！！！！」
最低でもここいったいを消し飛ばすかも。

「う、うん」

結界を張ったあと異常に気づいた二人が焦っている

「「なのは、やめてくれえええ！！！！」」

ユーノが星になった。敬礼

「逃がさないよ。」

「えっ」

そして星になった。

と思ったかコラアアア。

なんとか逃げられた。

そして、フェイトの部屋のチャイムを鳴らして、変身魔法を解いて待っていた。

「フェイト、開けてくれ」

「あ……恭二くん」

「悪いこんな遅くにわるいが、ケーキ食べる？」

「うん、分かった。」

早く中に入って」

とりあえず、フェイトに食べさせなきや

普段からインスタントやレトルトしか食べない為、俺が晩ご飯だけでも食べさせている。

とりあえずアルフ……

「あれ？アルフは」

「分からない。いきなりいなくなった」

「そつか、じゃあ今日の料理は決定した。」

工程を省いて完成。

「今日は、牛肉のステーキとサラダとコンソメスープだ。」

「ありがとう。毎日作って来てくれて」

「いやいや全然へーきだつて、俺ん家は兄デバイスがいるし、困っていると
きはお互い様だよ」

「うん、ありがとう／＼」

ん？いきなり頬を赤く染めたがどうしたんだ

「もういいよ。さあ食べてくれ」

「じゃあ、いただきます」

そして、フェイトと話をしながら食事をしていた。
デザートタイム

「このショートケーキおいしいね」

二人でショートケーキを食べていた。
アルフごめん

「でしょ、今のお気に入りなんだ」
失敗しなきゃだが

「あつ、頬にクリームがついてるよ」

とタオルでふいてくれるのだが今は不思議な気分であった。

「う・・・ ありがとう／＼／」

「どういたしまして」

ただ頬を拭かれただけなのに、胸がモヤモヤし、顔が熱い。

「大丈夫。顔が赤いけど」

フェイトが、顔を近づけた。

確か体温計は・・・ないな

そしておでこが触れ合った。

「うーん、熱はないみたいだけど、顔が最も赤くなってるよ。」

や、ヤバい。なんか知らんが心臓が鼓動が速くなった。

「うん、今日は遅いし家に帰るね」

「ここに泊まらない？」

ポーカーン

「なんで、別に家が隣だしさ。」

後、男と一つ屋根下でいるのはつらいんじゃない？」

「うん、ありがとう。」

いつもいつも

「！／／／、気にするなって」

朝食を済ませた後、学校へ行き、睡眠を取りたいのだが

「（フェイトの寝顔可愛かったな。」

あの笑顔も可愛いし、それに、は！？俺はずっとフェイトの事ばかりしか考えてるし最悪だ）」

結局、何もせずずっとフェイトのことしか考えていた恭二でした。

やるべきこと（後書き）

最近、レポートや宿題が溜まって死にそうな月森です

感想などお待ちしております。

では、また今度

猫って可愛いね(前書き)

すごく強引な終わりです
いつもですが

猫って可愛いね

放課後、アリサの家に行くことになり、何故アルフがいるし。

念話になるため、音声だけお楽しみください。

「やっぱり、アルフさん」

「ん？あんたか」

「そのけがどうしたんですか。それにフェイトちゃんは？」

終了

それと 동시에 アルフはオリの奥へといってしまった。

なのは達はゲームをしに中へユーノはアルフの話聞くことにした。

そしてアルフの話聞いてクロノが

「（プレシア・テストロツサを捕縛する。

アースラを攻撃した事実だけでも逮捕する理由にお釣りが来るからね。）」

と面倒なことを言った。

「（だから艦長が令があり次第、プレシアの逮捕する事になる。）」

やっつけてらんねえ!!

仕方ない、テスタロッサ危機脱出作戦を第二に変更しよう。

「（君はどうする高町なのは）」

「（私は・・・私はフェイトちゃんを助けたい。）」

決まったな。という訳で時空管理局にハッキングでもかえますか（ネロに）
なのはの話は続く

「（アルフさんの思いと私の意志、フェイトちゃんの悲しい顔は私もなんだか悲しいの。
だから助けたいの悲しい事から）」

いい話だな。

「（それに、友達になりたいって伝えたその返事を聞いてないしね）」

「（こちらとしても君の魔力を使えるのはありがたい。
フェイト・テスタロッサについてはなのはに任せる
それでいいか）」

全く管理局潰そうかな。全ての惨劇を断つ為に

そして、楽しい日は終わり、辛いそして悲しい日々が続く。

その日の朝は起きたくはなかった。
だって、なのは、フェイト、はやてのつらい毎日に変わる訳だから。

「マスター、行くのか」

とネロが

「ここからは修羅の道、旦那はやり通す覚悟はあるのかい」

とクリーが言う。

「俺は・・・俺は迷わない。

例え阿修羅がいようと間違えている道だろうとも、屍を踏んで行くことになるうとも後悔だけは、後悔だけはしない。

後悔したら止まってしまふから、迷えば死ぬからだから俺は走り続ける。」

それが俺の覚悟、そして信念。

それを支えにする事になるから。

二人は微笑んでいた。

「いくぞ、戦友よ、覚悟は充分か」

「おう！！！！」

そして俺達はこれからの長い、長い戦場へと足を出した。

「済まん、遅くなった。

状況報告しろ」

「はい、ゼロさん後ろの人は」

俺の後ろにいる奴らを指した。

「ああ、こいつらは俺の仲間のアーチャーとランサーだ」

「アーチャーだ。よろしく」

「ランサーだ、旦那がお世話になったな。」

「ユーノ・スクライアーよろしくお願ひします。フェイトとなのは戦闘を始めたばかりです。」

ユーノから

ハッキリいってしまえば、二人共天才だ。

なのはは、大量の魔力を持ち、それを使ってばっからしい砲撃を行う。

まさに、移動要塞にジェネシスを何発も撃つようなもんだ。

一方フェイトは、なのはみたいに砲撃ではないが、スピードを生かしたスタイルだ。

ただ、ガードが脆いのが弱点だがそれが、利点の時もある。

転生者だから言えるが、攻撃は最大の防御なりと言うことわざ道理に、スピードで相手を翻弄し、チャンスはたたき込める分だけ叩きこむ。

といったようなそんな感じだ。

流れが変わる瞬間

フェイトが突然、魔法陣を作る。

それに翻弄されるのは
バインドに捕まった。

「ライトニングバインド」

「不味い、フェイトは本気だ。」

「なのは今サポートを」

とかほざくユーノ

「止めとけユーノ」

ユーノはその言葉に驚いていた。

「なぜです。このままじゃなのはが」

「だからこそだ、ここでやられるようじゃ意味がないんだ。
まだ本人は諦めてないしな」

そうなのははまだ諦めてはなかった。

「フォトンランサーファランスシフト
撃ち抜け、ファイア」

大量のフォトンランサーがなのはに向かっていき命中した。

「……」

「ありゃあ痛そうだ」

「なのは!?!」

「フェイト!?!」

二人?が叫んだ。

煙がはれるとそこには、無傷のなのはがいた。

「撃ち終わるとバインドつてとけるんだね」

そうゆうとなのははレイジングハートをフェイトに向けた。

「今度はこっちの番だよ」

レ「ディバインバスター」

なのははディバインバスターを撃つとフェイトは残りあつたフォトンランサーを放つ

だが、威力が足りなくフォトンランサーは消えフェイトはディフェンダーを展開するが押されていた。

「あれってイジメじゃね。」

「確かにそう思います」

フェイトはなんとか耐えたらしい。

「フェイト!?!」

だが、フェイトのバリアージャケットはボロボロなのになのはオ
ーバークイルする。

「受けて見て。ディバインバスターをのバリエーション」

レイジングハートに魔力が集束する。

まっまさかアレは

「ユーノ、大丈夫か。体が震えているぞ」

見るとユーノは生まれたての子羊のようだ

「ゼロさんも人のこと言えませんよ。」

何！？ あっ本当だ。俺も震えているや
フェイト逃げ……

「バインド！？」

「（ヤバい（大変）のはは、フェイトを殺る気だ）」
「ガタガ
ダブルブル

「全力全開、スターライトブレイカー」

あっ終わったコレ

フェイトにSLBが命中した。

だが、フェイトは生きていた……！！

デタラメすぎるだろコレ

「フェイトちゃん……！！」

なのはが叫んだが、なんとか海に落ちる前にキャッチした。

「う……うん」

「気づいた(か)フェイト(ちゃん)」

「ちょっと、ゼロさん!!」

「あ……」

なのはが叫び、フェイトは赤くなった。
俺はただお姫様抱っこしているだけなのに。

「あの、おろしてください(やった)。ゼロさんにしてもらった」

「う……(ずるいなフェイトちゃん。私もしてもらいたいな)」

「ん？ ああ分かった」

「私の勝ちだね」

なのはは気を取り戻したようだ。

「そう、みたいだね」

なんとか、カオスな闘いだった。

『よし、なのはジュエルシールドを確保して彼女を…』

『いやきた』

エイメイさんが言つと空が曇り、フェイトとなのはに向かって雷が襲ってきた。

「やらせるかよ。コアを回路に変更」

ギリギリ間に合わせる

「I am the bone of my sword. (体は剣で出来ている。)」

彼が使う、最強の盾を…

「熾天覆う七つの円環 ! (ロー・アイアス!)」

熾天覆う七つの円環 ロー・アイアス

光で出来た七枚の花弁が展開、一枚一枚が城壁と同等の防御力を持つ。投擲武器に対しては非常に頑強である一方、通常武器に対しての防御力は示されていない。だが、そんなのは関係ない。この世界では、遠距離魔法の無効になる。

「……綺麗」

二人はそう言っているが、フェイトが所持していた。ジュエルシールドは盗られた。

そのうえ、リンカーコアはボロボロ、アイアスは残り四枚

「ごほ……」

「ゼロさん!!!」

吐血した。当たり前だ。

コアの疑似化はコアを無理に変えるからコアに傷がつき、それを修復しようと魔力を使いその使った魔力は血といっしょでる。

「（流石にストナーサンシャインを使って修復してないから相当キツいなコレ）」

「大丈夫か!!!」

「ごほ、ごほ……大丈夫だ。ただ不可をかけ過ぎた。

済まないジュエルシードを盗られた。」

「そのことに関しては大丈夫だ。尻尾は掴んだから戻って来てくれ」

俺達はアースラに帰還した。

そして、プレシアがアホなことをいっていた。

「アリシアはもっと優しく笑ってくれた。」

ダメレ

「アリシアはときどきワガママもいったけども、私の言うことも聞

いてくれた。」

ダマレ

「アリシアはいつでも私に優しかった。」

ウルサイダマレ

「フェイト、やっぱりあなたは偽物よ。

せつかくあげた記憶もあなたじゃダメだった」

「やめて、やめてよ」

となのはがいうが止まらない。

途中からは耳にすら入らなかったが、プレシアは言うてはいけな
ことをいった。

「あなたを作り出してからずっとね・・・

！大嫌いだったのよ

「ダマレエエエエエ！！！！」

怒りの臨界点を突破し、感情が流れた。

コロセ、コロセ、コロセ、コロセ、コロセ、コロセ、コロセ、コロセ、
コロセ、コロセ、コロセ、コロセ、コロセ、コロセ、コロセ、コロセ、
コロセ、コロセ

遂に俺はあれを使うことを決定した。

メイオウ攻撃

「大変、大変、屋敷内に魔力反応多数」

「なんだ、何が起きている」

「私達の旅を邪魔されたくないのよ。」

「私達は旅立つの忘れられた都、アルハザードへ」

「分かった。送ってやろう冥土へ」

「プレシアの話しを聞いた途端、クロノは走り出した。」

「クロノどこへ行く。」

「僕が止めてくる。ゲート開けて」

「いや、俺が行こう」

「ゼロさん」

「リンディさん、30分ぐらいありますか」

「ええ」

「なら行きます。あそこ一体を消滅させしてきます」

「え、なにをいって」

「魔力のリミッターをはずす」

「「・・・」」

全員が啞然とした。

「魔力ランク推定EX」

EXは化け物の類

それが目の前にいるのだ。

「なのは」

「は、はい」

「フェイトに伝えてくれ 済まないと」

なんせ母親ごと、消滅させるからしかない

「リンディさんと言う訳で少しやってきます。」

俺は、ゲートで戦地にむかった。

こっから無双

転送した場所は門の前。そこにはプレシアの機械共がいた

「バーサーカー、済まない。

ここでお別れだ」

「気にするなマスター。それは即が決まっていたこと。早く任を果たせ」

済まないバーサーカー

「令呪もって公使する狂えバーサーカー」

ブチブチ

バーサーカーが本当の狂戦士に変わった。

「令呪もって公使する。

あの機械共を全て壊せ」

最後の令呪を使いバーサーカーはあの機械を壊す

「……………！」

雄叫びを上げて……

戦闘を始めてから1分足らずで機械共は壊れた。そして

「結局きたのか」

「ははは……」

「にゃはは……」

「艦長の命令だ」

上からユーノ、なのは、クロノ

「仕方ない、じゃあ行くぞユーノ、なのは、クロノ、バーサーカー」

「「おー!!!」」

「僕に命令するな」

「―――!」

なのは達はバーサーカーが叫んでビックリしていたが、気にせず中に入った。

「面倒だ碎ける、プラズマサンダー!!!」

「―――!」

今俺は、二手に別れる道で機械共を清掃していた。

クロノはプレシアの所へ、なのは、ユーノは最上階の駆動炉の封印にいった。

なぜここにいるか、決まっている待っているんだよこの物語の最後を飾るものを

「やっときたか、フェイト」

そして、赤き光が最上階を目指す

「サンダーレイジ」

「フェイト」

フェイトがきたら、後ろから大型の機械がでてきた。

「よける二人共」

その声が聞こえた瞬間に機械がキャノンをチャージした
「させるか

くらええ、ストナアアア・サンシャイイイイイン」

そしてあつたた機械が蒸発した。

その声がした方向を見ると

「ゼロ(さん)」

彼がいた。

「や、やばいな」

焦りがあった。

どう頑張つて変身魔法が邪魔だあああああ

「(仕方ない、冥土を覚悟するか)済まない、騙して悪かった」

「.....?」

普通なるよね。そんなこと

そして変身魔法を解いた

「.....」

一同啞然

「やあ、久しぶりなのは、フェイト、ユーノ、アルフ」

「……ええ、恭くん二！一！」「……」

驚きすぎだねみんな

「なんで、キヨンくんがここにいるの。」

あと、フェイトちゃんとはどづい関係」

説明中

「とづいことだよ。」

「だったらなんで魔力反応がなかったんだい」

「みんな気づいてみたいだが、ゼロの時も魔力反応あった」

「……あ……」「……」

「でしょ、そづゆづいことだ」

まあ楽にはなつたな楽には

「色々と放置して早く封印しに行くぞ。」

「待ってよ」

そして最上階到達

ここからは二手に別れることになるが

「なのは」

「フェイトちゃん」

何この百合展開

「アルフ、ユーノ。」

ちよっと八つ当たりで駆動炉消滅させてくる」

「「うん頑張つて」」

やっつけられるか!!

「あれ、キヨンくんは」

「あのね、一人で駆動炉を封印（消滅）させてくるってだからみんな、プレシアの所にいけだつて（流石にこの空気に耐えられないからとはいえないよね）」

「そうそう、そんなこと言ってたし、行くつよ（可哀想だったぬ）」

「「（恭^く二頑張れ）」」

一方、駆動炉あたり。

「くそ、くそ」

リベリオンとアストラルを持って暴れていた。

「あんな空気いられるかああああ！」

その後、1分でなのはと合流したのは別の話

到着。

ここからはフェイトの話

「あなたが、作ったただの人形かもしれませんが」

「だけど、私フェイト・テストロッサはあなたに生み出してもらって育ててもらったあなたの娘です」

「フハハハハハ」

だから何、今更あなたの娘と思えと言っの

「あなたが・・・それを望むなら」

「それを望むなら、私は世界中のどんな出来事でもあなたを守る。」

「・・・」

「私はあなたの娘だからじゃない。」

「あなたが私の母さんだから」

「く・だらない・わ」

「・・・」

「ここまで知っているがどうも違う。なぜ、彼女は泣いているんだ。」

「彼の言う通りね。」

「・・・！」

彼？

「彼がきてからよ。こんなにすらく感じるのは、フェイト。」

「か、母さん」

「ごめんねフェイト。こんなダメな母さんでごめんね」

「母さん何を」

プレシアの床が崩れた。

「母さん、母さん」

「ありがとう。私の娘フェイト」

やらせるかよ

「ネロ、クリー」

済まない。

その後、クリーとネロは最後の力でプレシアとアリシアを別荘改に連れっていった。

俺達はここから脱出し、今はアースラの救護室

「あれ、フェイトちゃんは」

「彼女は護送室、彼女はこの事件の重要参考人だからね済まないが、しばらくは隔離する」

「そんな」

「今回の事件、下手すれば次元断層を起こし兼ねないからね」

「その元締めは管理局なのにか」

「それはどうゆう事だ。」

「貴様等にいった所で分からんさ。

管理局＝正義と思っている奴はとくに」

「それはどうゆうことか説明してもらいましょう」

リンディさんキター

「この映像を見れば分かります」

それはプレシアとプレシアの上司の会話

『プレシア・テスタロッサ。』

次元航行エネルギー駆動炉「ヒュードラ」はまだ完成しないのか』

「すみません、もう少し何です。もう少し待ってください」

『あと1ヶ月後に実験を開始しろ』

「……！！待ってください。2ヶ月あればできますから待ってください」

『無理だ。もし、1ヶ月後に実験ができないといったら違法研究罪として貴様を逮捕する。』

娘はそうだな、孤児院に引き取られたふりをして研究材料として使うか』

とのような会話があり、そして実験の日に事故が起きた。

「こんなのを見つけましたがそこいらへんにばら卷いていい？」

「……」

「別に自分で消しに行くのもありだな」

「キヨンくんすごく黒いの」

なのはには言われたくない

「要件はなんですか」

「艦長！」

「流石だリンディさん。」

要件は一つ、フェイトをリンディ家に入れることだ。」

ガツシヤアアアン

「なんか酷くない」

「いや、あまりにも普通だったんで」

「いやリンディさん家ならなんとかすぐにフェイトとなのはがいられる時間が多いと思いました」

「そうですね。確かにそれなら簡単ですね。その条件をのみまじょう」

「やった。ありがとうキヨンくん」

「どういたしまして、良かったねクロちゃん。かわいい妹が増えて」

「な、うるさい」

こうして、事件は終わりを迎えた。

と思ったか

まだくだらない話があるから続く

猫って可愛いね（後書き）

今日、龍神様からバトンをもらいました。

小説の主題歌、無しとかありですかね（笑）

とりあえず、考えておきます。

感想と復讐の闇と殺人狂（まっじんき）のキャラクターは毎回（一話しか出してないですが）募集しています。

ではまた会えたら会いましょう。

今日も幸せと平和でありますように

蛇足話 プレシア・テストロッサが凄くおかしな事を言った件について(前書き)

ついに無印編終了DA

蛇足話 プレシア・テストロツサが凄くおかしい事を言った件について

今、アースラでフェイト達と別れて別荘にいるプレシアとはなす予定だったが

「いや、大変でしたね。そんな人達の為に実験なんて」

「本当よ、まったく（ry」

「何このカオス」

〔蛇足話だから、プレシア先生の相談教室〕

「……………」

啞然。ごめんフェイト、俺は人生の歩み方を間違えたかもしれない。

「ああ、帰っていたのか恭二」

ちっ、気づきやがった

「あら、まったく強引にここにつれてきてどうするつもりかしら
キヤ」

どこで人生間違えただろうあの入

「とりあえず座れよ」

知らない男が喋る

「誰だあんた」

「俺か、お前だ恭二。
機動六課にいるが」

「まじか、なんで俺がいるんだ。
多分その頃は血を入れているだろ」

ふざけている。もう人間じゃないのに

「ああ、それは…なのは、フェイト、はやてその他に少しOHA
NASHIされそうになったから…」

「……………」

どじつたな

「それで私の所に来たんでしょ」

「だから、本来の予定と違うのか」

それなら納得

「それもあつた。」

「そうだからお前に渡したい物があるから」

二本の黒と白の太刀を渡された

「黒が黒龍、白が白龍だ。
だいたい説明は図書館でも見る」

結局の投げやり

「分かった。後で見えておく」

「じゃあ頑張れよ」

「お前が生きていたらな」

帰ったら O H A N A S H I が待っているからな。

「……ガタガタブルブル
大丈夫だ……」

今にも消えそうな声で去っていった

「大丈夫かしら」

プレシアさんが、疑問を口に出す

「大丈夫じゃないです絶対に」

ミンナヤメテクレエエエエ！

O H A N A S H I シヨウ

イヤアアアアアア！！

生きていろよ……

と場所を変えてアリシアの所へ

「で、大丈夫なの本当に生き返るの！」

「大丈夫ですよ。この太刀のおかげで」

そうして白龍を抜刀する

「魔眼解放（死の運命を断つ）はああああ……！」

そして、魔眼で見えていた門が消えた。

「……………」

緊張がはしる。これで起きないなら最終手段を使っしかない

「う……うん、あれお母さん」

「アリシア……！」

プレシアはアリシアに抱きつく

「（ああ良かった。成功して）プレシアさん、後これを飲んでください」

と若返りの薬を渡した

「これは」

「若返りの薬です。これであの頃（A`sでのフェイトが見た夢のプレシア）に戻るはずです。病気は既に治っているため大丈夫ですよ。」

俺はこれで、やらなきゃいけない事があるので失礼します」

「何から何までありがとう。」

「ただ何しに行くの」

「それは、プレシアさん達の戸籍を偽造してきます。」

「一応、俺の親戚扱いしておきます。」

「後住める家も」

「うわぁ、やることがいっぱいだ。」

「プレシアさん達の偽造、今の俺の転校などなどやってきますか。」

「何から何までありがとう。」

「本当に素晴らしいほど優しいのね」

「いや違う、俺は」

「ただの偽善者ですよ」

次はA`s編か

蛇足話 プレシア・テストロッサが凄くおかしな事を言った件について（後書き）
ついに無印編終了しました。（大切な事なので二回言いましたよ）
なので次からははやてちゃんが出てきます。

次出す時の違和感

既にアリシア（偽名は未定）、恭二、フェイトは転校済み

まさにのあの人達が出ます

と言ったような感じです

とりあえず、アリシアとプレシアの偽名大丈夫募集

日曜日でお願いします。

ではまたあいましょう

偽名が決まるまで更新できませんのでお願いします

蛇足話その二 彼らの登場（前書き）

特に意味はありません

蛇足話その二 彼らの登場

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバイ
ンオーグ。」

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国
に至る三叉路は循環せよ」

「閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉
じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。」

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

「
Anfang^{アニアフ}」

「告げる」

「告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ 「！」

「問おう、君が私（俺、我）のマスターか」

サーヴァントとマスター達を呼びました。

「蛇足話その二 Fateからの参戦者達」

どうも、主人公でサーヴァント+マスター達を読んだ井伊神恭二です。

何故サーヴァントとマスター達を呼んだ理由は時は戻ります。

回想

今、俺井伊神恭二は悩んでいた。

その内容は

「マトモな飯が食べたーいーい!!」

今から二週間はファーストフードしか食べてない。

何故なら、いつも作ってくれるネロがいないからだ。

「……………!!」

ソノトキ、恭二ニ電流ガ走ツタ

「(そつだこつ言つときは、オリジナル(エミヤシロウ、衛宮士郎)を呼べばいいんだ!!)」

我ながら天才とかほざきながら儀式の準備をしていた。

「うーん、ただ食事係と言つのもわるいし、……………!!」。

キタ (。。(。 (……………!!)!!、それにプラス他のサー

ヴァント(セイバー、キャスター、バーサーカー、ライダー、ラン

サー、アサシン、ギル、真アサシン）を呼べばイける、俺が戦わなくて戦ってくれるし、食事は大丈夫、材料もイける、修行もできる、一石二鳥じゃないか、……！！！（本日三回）それに、マスター（衛宮士郎、遠坂凜、イリヤ、間桐桜、葛木先生）を呼べば魔力的にも、肉体的にも強化できるじゃないか。

しかも、アイリと切嗣も聖杯戦争がないかもしれない時代になるかも、と決まれば（ry）ここにはキャラの崩壊以上でこんなキャラいったっけレベルなので気にしないでください」

凄く発狂したんじゃないぐらい騒いだが別荘でしたため関係ないその後聖杯を作り、サーヴァントの召喚とマスター達の呼び出しをしたわけである

回想終了

「……という訳でサーヴァントとその時のマスター達を呼び出しました。

すいませんでしたああああ！！！！」

サーヴァントとマスター達に何故呼んだなど聞かれて事情を言っただけですぐさまバク転三連続土下座した。

「恭二君、ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

凜から質問がきた

「あの何でしょうか」

ビビりながら質問を待った

「今何故か、魔力が凄く満たされた感じがあるんだけど何故かしら」

「確かに、マスターからの供給以外にも魔力供給があります」

セイバーさんから、ん？あれおかしな、彼らに何故かあるんだけど

「皆さんの質問の答えとしては、魔術回路とリンカーコアが直結しているからじゃないですか」

「「リンカーコア????」」

あれみんな疑問だよな

「あのそれは（ry）詳しいはWikiの魔法とリンカーコアをこ
覧ください」と言うわけです」

説明終了

「確か無駄に魔力があると思ったたらそうゆうことだったのね」

今考えれば何故凜が仕切って、セイバーがサーヴァント代表見たく
なっているの!?

「恭二君だっけ、何故僕たちを呼んだんだい」

切嗣さんから

「それは、家族って答えはだめですか」

そうこれが答え、俺には家族がない前世では母一人だったから。父親って言うのかは分からない。

だから教えて貰いたいから

「俺って家族がいなくて、学校って何か分からないくて、だから教えてもらいたいな。ってただそれだけです」

「……………！ なら、君は僕たちの家族だ」

「はい」

そんな事もあり、俺は衛宮恭二になった

蛇足話その二 彼らの登場(後書き)

いい話だな(笑)

恭二「俺、キャラ変わっていない」

大丈夫さ、スカがきてもつとおかしな事になるから

恭二「ふざけるナアアアア!

食らえ、突き穿つ死翔の槍ゲイホルク

「!

なめるな。アーチャー召喚

アーチャー「やれやれ貧乏くじを引かされるとは

「 I a m t h e b o n e o f m y s w o r
d . (体は、剣で出来ている」

「 熾天覆う七つの円環” (ロ | ・ アイアス)

「!」

恭二「チィ、食らえええ」させるかアアアア「何!?!」

トラップカードオープン! 『必殺の陣形』

この効果によってなのは、フェイト、はやてを召喚! そしてプレイヤーにダイレクトアタックする

恭二「なっ!?!」

なのは「キヨン君、O H A N A S H I I ようか」

フェイト「どうしてそんなことをしたの」

はやて「洗いざらいはいてもらおうかい」

恭二「いやいや、おかしいって、はやてはまだ出てないし、喋り方おかしいって」

速攻魔法発動！『主人公の封印』

効果で恭二、貴様は、一切の攻撃と能力の使用、行動ができなくなる。

覚悟しろや恭二イイイイ！！

恭二「ちょ、おま」

なのは「少し、頭冷やそうか」

恭二「やめるおおおお」

なのは「全力全壊！！」

フェイト「雷光一閃！」

はやて「響け終焉の笛！」

恭二「落ち着けええ！！」

なのは「スターライト」

フェイト「プラズマザンバー」

はやて「ラグナロク」

消える恭二

な・フェ・は「ブレイカー!!!」

そして恭二は星になった。

く A、S 編

いまいち収集がつかない(前書き)

久しぶりに更新しました。

テスト？ナニソレオイシイノ

「はあ…」

ジュエルシード事件から少したった今、俺は夕飯の買い物帰りである。

何故するかは、ほんの二時間前である

回想

「弓兵如きが図に乗るなああ!!」

青タイトスの男が言う

「だが、その弓兵に養って貰っている奴はどこかな」

黒い軽鎧に赤い布骸聖布を纏った男がいった。

「ほざけ」

紅と黒と白がぶつかいあう。

そもそもなぜアーチャーとランサーが戦っているかは少し前に戻る。ランサーが、一匹も採れず帰ってきたため、嫌がらせとしてランサーにホットドックを作り喧嘩になった。

それをおいといてもまだあった。

「セイバー、好きだああああ!!」

金色の鎧を着たところが、蒼きドレスに白銀のような鎧を着た女性にいった

「世迷い言を、シロウ、バーサーカー、あの変態王に鉄槌を下すべきです」

「……………」

バーサーカーと呼ばれた大男は深く頷いた。

「変態王、セイバーは俺の物だああ!!」

士郎（一応兄）が叫ぶ。つてか、そんなキャラだった（…）

「シロウ…／＼」

「セイバー…／＼」

士郎とセイバーが二人の世界に入ろうとするが、

「雑種ううう!!」

流石が天と地を乖離した王様、それを邪魔した。

「フェイカー、それは王である我の物だぞ。人の宝に出してただで済むと思うなよ!!」

あら、ぶち切れとる

そして、ギルに援軍が

「衛宮君、そんなことをしてただで済むと思う？」

赤い悪魔… 何でギルと同じこといつてるの？

「フフフ、セイバーさんたら何シテイルンデスカネ。

先輩ハ私ノ物ナノ……」

アラ、ライダードウシタノ？」

桜は完全にヤンでるよ。やっぱり、魔術で肉を八つ裂きにしていたからな…

「さ…桜。何故か黒いオーラが人一倍でてますよ……」

かわいそうなライダーさん。確実に桜に O H A N A S H I I さ
れたよ

こちらでは、アル意味カオス

「宗一郎様、あーん」

「あーん、うむ、うまい

腕を上げたなキャスター」

「ありがとうございます。宗一郎様に誉められちゃったキャ」

なにやってるんだ、あの年増。

人に若返りの薬を作れと脅した挙げ句、マスターと同じ年になるとは思わなかったが

「切嗣、あーん」

「あーん、美味しいよアイリ。士郎からでも習ったのかい」

「あつ分かる。士郎から教えて貰ったのよ、だけど複雑な気分ね、自分の息子から料理を教わるのは」

「いやいやあんたはまずいって、砂糖と塩を間違えたり、ケッチャとソースまちがうんだから」

「ず・る・いゝ お母様ばかり、シロウを独占して」

「やだ、こんな家族……」

「あの、切嗣さん」

「さん付けはやめてくれ。僕達は家族なんだから」

「そうだ、俺は衛宮一家にもらった上に、息子として扱ってもらっているからな。」

「夕飯の買い物に行ってきます。」

「一応、アサシンと真アサシンを連れてきます」

「これで何とかはなる」

「分かった、気をつけて行ってきなさい」

「おっと、行く前に」

「皆さん、今日の夕飯は何にしますか？」

「」「」「鍋」「」「」

一致団結するか、普通

「じゃ行つてきます。お義父さん、お義母さん、お義姉さん、お義兄さん」

俺は買い物に出た

～終了～

カオスだった。別荘が生きているのを祈るしかない。

「マスターよ、頼みごとがあるんだがいいか」

「何、アサシン」

珍しいなアサシンのやつ、いつも頼みごとなんていわないから

「少し小鳥と戯れてくる」

要するにナンパですねわかりません。

だが流石にあの服装はまずいから、遠坂に手伝って貰った

「なるべく、呼んだらきてね」

どうせ忙しいっていられるがな

「済まぬな。これといってはなんだが、今度、ツバメを斬るコツでもお教えしよう」

まじで！！ ツバメさえ斬れば燕返しも夢じゃない

突然だが、俺は、毎日サーヴァントに修行させてもらっている。

月曜日はセイバー、火曜日はアーチャー、水曜日はキャスター、木曜日はランサー、金曜日はライダー、土曜日はアサシン、日曜日は切嗣、遠坂の魔術師教室で当番が来ている。

毎日死にそうになるが、死合いを積むのは良いことだと遠坂さんがいつていた。

ともあれ、何とか食材を入手に成功した。

「（確か、アーチャーさんが、鍋ならセイバーさんはすき焼きがいつて言ったし、丁度いい牛が別荘にいたな）」

「主」

突然、真アサシンが現れた。

「どうした」

「なのは嬢とフェイト嬢が謎の騎士と戦闘中、なのは嬢は負傷フェイト嬢は戦闘中ですが劣勢、人数は四人、一人は戦闘地域から離れている模様

どうされますか？」

多分、闇の書の騎士達がいるか

「分かった。近くにいるアサシン達は」

「二十人です」

「よし、アサシン達を集める。そして、全員で後方の敵を叩け。俺はセイバーを連れてフェイトの援護に入る」

「御意」

真アサシンは消え黒い人影が一点に集まった。

そして、俺は遠坂さんに念話をした。

「（お取り込みかもしれませんが、遠坂さん、セイバーを貸してくれませんか）」

「どうし（ガキーン！）たつて言うの（突き穿つ死翔の槍、熾ゲイ・ホルク天覆う七つの円環ロー・アイアス）」
聞こえるのは乱戦の音

あのー皆さん、あまり壊さないでくださ……無理か

「あのですね、ちょっと戦闘で剣士がいるらしいので、借りたいたと思います。

後、ライダーさんお願いします。ランサーさんは、材料の運搬をお願いします」

セイバーにはシグナム、ビータは俺、ライダーは……かわいそうだからといった理由だ。

その後、なぜかセイバーさんが約束された勝利の剣エクスカリバーを使ったのは別の話だ。

「恭二、その腕はどうしましたか」

ライダーが俺の左腕が装甲で覆われていることに気づいた

「これはアルターというのだが……と言うもので、こいつはシエルブリットといって後ろについてある羽根は推進剤だから、セイバーさんの魔力ブーストの代わりをするから便利なんだ」

「なるほど、確かにあなたにはそうゆうものがありませんでしたね」

それもあるんだがセイバー、実際は、レッドクイーンがあまりにもやりすぎたためなんだ。

レッドクイーン…俺が、ネロが使っていたレッドクイーンをまたさらに魔改造を施した剣。

噴射剤を五倍にし、ベルカ式カードリッジシステムを搭載しているが、装填数六本で一本で最大量まで持つていくことができるため、他のデバイスには使えない。というか、デバイスが粉碎するというのに、推進噴射機構もグレードアップさせて、下手すれば大火傷になる程になった、

なぜレッドクイーンが粉碎しないかは、一応アームドデバイスにして、装甲を超合金ニューZや武装連金で出てくるシルバースキン、鉄のラインバレルのDソイユをつかってレッドクイーンの耐久力を最大まで上昇させているが、これで壊れたらもう使えない。俺の体が持たないのが弱点だがそれをシエルブリットでどうにかしている状況。

まあ、大体はデバイスのおかげなんたげどね。

そうして説明している間に到着。

状況はなのはが砲撃準備中で、フェイトが戦闘中か

「(ライダーさん、あの僕がああ結界を破りますんで、ダガーで攻撃してください。その後、ライダーさんはあの耳がついている男で、セイバーさんが剣士、俺はハンマーの奴をやります。一応ですが、リンカーコアの接続をきって、炉心と回路を起動させてください)」

「(分かりましたキョン(恭二))」

なぜか、ライダーは俺をキョンと呼ぶ。不思議だが、なのはも同じこと言っていたはずだが会わせたことないのにな……

「いくぞ!! アクトカートリッジロード!!」

『Load Cartridge』

レッドクイーンのカートリッジを使い、噴射剤を限界まで回した。そして背中の羽根を一つ粉碎させた。

「衝撃のファーストブレイクウウ!!!!」

これは、なんとなくつけた(パクった)名前である。

背中の羽根を粉碎する事で噴射剤の代わりになってそれで破壊力をあげつつ、レッドクイーンのプロペラ機構からは大量の炎がでており、噴射剤がよくでていく証拠であり推進力が、カートリッジシステムと噴射剤で余計に加速して破壊力が抜群だ。

「え……!!」

バリアを破った瞬間、桜色の光に包まれた。

「キヨン（恭二）—————！！！！」

バッチリあつた。

頑張った。

恭二「いや、頑張っていないからね。変なところで止めるなし!」

気にするな。次回予告

恭二「チツ!.....次は一気に話が飛ぶが、三話編成でやるよ」

次回、魔法少女リリカルなのはく転生者の災難 第分からん話、シ
グナム対セイバー

提供は、自称主人公達以外のセリフがなからず飛ばしているから駄
作を作り上げる天才の月森和樹と

恭二「実際は一回しかも妹が見ていたのをみただけで、今は恥ずか
しくてみれない作者が作った主人公の衛宮恭二でした」

またみてね。

恭二「...で、ぶっちゃけた話大丈夫かテスト?」

無理ゲーになった。

恭二「また怒られるぞ親に、今回ミスったら本気で戸籍はずされる
ぞ」

うう………それだけは避けたいが、ハワード様の作品を完全に見た
いのにR-18とは………無念!!

恭二「諦める」

セイバ対シグナム

今から簡単な説明をする。

俺はバリアーを破った瞬間、なのはの砲撃を食らった。おしまい

となことで犯人を逃がさないため、フェイトたちの引継ぎをするこ
とになったため、セイバーにはシグナム、ライダーはザフィーラ、
俺はヴィータを相手をする事になったから。まずは、烈火の将
剣の騎士シグナム対騎士王または腹ペコ王 クラスセイバーアルト
リア（アーサー王）

の戦いの火蓋が切って落とされる……

セイバ side

セ・ラ「マスター！！！」

マスターが桜色の光に包まれてしまいました！！ 大丈夫でしょう
か？

恭「……………」

セ「マスター、大丈夫ですか？」

良かった、マスターは無事みたいだ。

恭「大丈夫だ、セイバー、ライダー」

ラ「全く、無茶も程ほどに。これではサクラや衛宮一家に怒られる
ではありませんか」

全くライダーの言うとおりだ

「済まない、ライダーさん、セイバーさん。
とりあえず、さっき言った役割をお願いします」

確か、私があのだ剣士の足止めですか。

シ「貴様は何者だ!!」

セ「騎士なら、自分から名乗るべきじゃないですか」

シ「……………!!! 済まない。」

私は、ヴォルケンリッター烈火の将 シグナム 貴様は」

恭「（おい、セイバー）」

セ「（何でしょうかマスター）」

恭「（どれでもいいぞ名乗るのは、別に真名がバレたって気にする
な。」

ここには聖杯がない。だからこそ、好きなようにやれ」

これもマスターが心配したのでしょう。

なら私もそれを答えなければ

「ならば言おう。」

私は、サーヴァントクラスセイバー、真名をアーサー・ペンドラゴ
ン……」

「同」「……………!!!」

それは驚くだろうと恭二は言っていますがなぜでしょう

セ「では始めましょう烈火の将」

シ「シグナムでいい、アーサー王」

セ「では私はセイバーと呼んでください。

ですが、ここで剣の錆にしますが」

シ「そうか、私はかの有名な騎士王と戦えることを誇りに思う」

セ「そうですか。では戯れもここまでにしよう。

シグナムよここであなたを討つ」

・
・
・

キーン！！ キン！！

なる程、流石は烈火の将と呼ばれる事もありますね。
シ「くっ、流石だな」

キーン！！ キーン！！

セ「流石です。ここまでしたのはアサシン以来です」

シ「やはり、その見えないのは辛いな！」

シグナムには悪いのですが、今の聖剣は風の鞘 インヒジブル・エア 風王結界を使わせ
てもらっていますから。

不可視の剣は接近戦は有利な状況を作り出すのは必然的です。

シ「仕方ない、こちらにも本気をみせる！！」

その瞬間、シグナムの剣に魔力が溜まっていきます。流石にこれは、
マズいと思い、鞘の風を開放する。

「紫電一閃！！！」

「ストライク・エア
風王鉄槌！！！」

炎を纏った斬撃と風の鉄槌がぶつかりあった。直後、恭二が戦闘し
ている場所で爆発がおきました。

シ「ヴェーター！！！」

セ「マスター！！！」

私とシグナムはその場所まで移動しする。

セ「（マスターご無事で！！）」

セイバ
I
side
out

セイバ対シグナム（後書き）

駄作ですね、わかります。と知っている人はいると思いますが、我慢してください。

私もこれ以上に酷い出来はないのですが、なにかあげないときついので

文句は言いませんから我慢してください。

（；。 ）ガクガクブルブル

圧倒する力と加速する闇

恭二side

「ちい！！ 誰だてめえは」

今俺はビータと戦っているときに、転移魔法？ できた仮面の野郎と戦っている。
ビータは重傷だが一応、全て遠き理想郷アウアロンを使っているため死ぬことはないと思う。

「おい、なんか喋るよ」

「……………」

だんまりかよ、畜生。

俺はレッドクイーンを再び構えると山田（恭二任命、仮面の野郎）が見覚えのある刀を構えた。

「（あれは斬魄刀！？ ってことは、転生者か！！！！）」

そう山田は、黒き刀《月牙天衝》を持っていた。

そしておれは、レッドクイーンのイクシードとカッターリッジを二本使い剣に魔力を集める。

相手も月牙天衝に魔力を喰わせているからだ。

「月牙天衝……」

「舐めんな!!! ドライブファイナルエア―!!!」
「尽かさず、ドライブを撃ち込む。」

ドライブファイナルエア―

これは、セイバーの風王鉄槌を追加し、ただ純粹に破壊力を上げるだけだ。

他のには貫通がついているが、こいつは貫通はついていないが、破壊力でどうにかする。まさに、ごり押しだ。

「チイツ―!!!」

簡単に月牙天衝を破り、ドライブは山田の右手をかする。

「……………!!!」

誰からか、撤退がでたらしく、その場から引こうとする山田。

「逃がすか―!!!」

「別に逃げる訳じゃありませんよ」

追撃に出ようとする俺だが、背後の誰からか。呼び止められた。

「だれ……………」

「テレポート」

そして、鈴木（背後にいた奴）によってどこかに転移された。

恭二side out

クロノside

「状況はどうなっている!!?」

今は地球にいる。やっぱりここは不思議な所だ。ジュエルシートもそれに、ミット式じゃない術式じゃなくしかかも、訳の分からないデバイスを使う魔導士、そして、恭二が連れてきた人達。全くここは頭痛の種が多いな。

「艦長、転移反応が確認されました。

それに恭二君の反応もロスト」

「エイミー、転移先を特定して迅速に!!」

「はい!」

そして、彼が見つかったときには、既に死体だった。

クロノside out

圧倒する力と加速する闇（後書き）

見ていただいた所すいません。

今回、この小説の更新が不確定になりました（今更ですが）

理由は、部活や検定、レポートなどその他多数になりました（笑）

ということ、こんな駄作を見ていただき、誠にありがとうございます。

脱駄作をするために、指摘などを言っていたら嬉しいなーと思います（別にMじゃありませんよ）

今回も読んでいただき、ありがとうございます。これからも脱駄作を目指して頑張っていきます。

理不尽なのは昔から

恭一 side

そう、俺は死んだ。

簡単に死んだ。

何でもなかった。

ただの後悔しかない。

“あれ”を残したから、そして彼女達を泣かせてしまった。
を助けられなかった。

自身の欲しくない。ただの偽善者だった。父（切継）や兄（土郎）のように正義の味方になりたいだけだった。

俺には、力があつた。だれでも救える力が…… ただそれをしなかった。

父は、殺ししか知らないからあの方法だけしかなかった。

兄は、力があつたが、それを使えず、奇跡（英霊）にすぎるしかなかった……あの丘に立つ一番人間らしく、一番苦しんだ彼女の隣に立てるように……

だが、俺はしなかった。

ただ怖くて、彼女達に嫌われたくなくて、もし、父や兄のようにしたら、兄は一を切り捨て、九を救うことしかできず、俺は十、全て救うことができる。

だからこそできない。

できるからこそ、やらない。人ではないといわれればすぐに折れるだろう。そして、朽ち果てるだろう。

兄のような運命など背負えない

だって、人間じゃないが、

“人間の自分”がかわいいから。

だから偽善者、だから剣にはなれない。

なれるなら、きっとそれは

“鉛”

I a m b o n e o f m y l e a d

所詮、一本の剣にもなれずまさに鉛。

生きた証もなく、戦いを起こしず、ただの化け物。

ただ支配するのは闇、消える正義。

だが、一点の光が導いているようだった。

光に吸い込まれる。

そこは城があつた 火に燃えた城が…

その男は、雷を纏った杖を持った男と対峙していた。

多分これは、オーデインとゼウスであろう。

何故か、頭に色んな情報が流れ込んできた。

これは、神々の戦い。

神達はそれを

“ラグナロク戦役”と呼んでいた。

それは些細なことだった。ゼウスは、デーメーテルを愛していた。

だが、彼女はオーデインの事が好きだった。

オーデインは、色んなものに愛されとていた。植物から神々まで、

彼は全てに平等に付き合つた。

その例は巨人族― 巨人族と神々は相性が最悪だった。

しかも、ゼウスは武器を強化してもらうため、無理やり巨人族の腕の良い職人にいった。

だが普通だったら、戦争や何か最悪な事態になるであろう。

しかし、巨人族はそんな事はしなかったからだ。

それもオーデインのおかげだった。

巨人族は、神は最悪だと思っていたから、オーデインと接しているうちに彼の優しさが分かり、それがなくなつたから。一つ世界を変えたのだ。

神とは、その代がなくなり次第、それに関係する神が選ばれ、オーデインもゼウスもデーメーターも……

そんな彼等だからこそ、ラグナロク戦役が起きた。

ゼウスが痺れを切らし、無理やりデーメーターとの子供を作つた。オーデインは激怒した。そしてゼウスに会うと、彼はそのことに激怒しながら言うがゼウスは、沈黙の一点張りだった。

オーデインも、感情に任せているほど馬鹿ではなかった。

オーデインは、神を従える神で、神々の王、オーデインよりも上の地位にいる。アトラギアにゼウスを神としての降格を申した。

アトラギアもゼウスの行動は目に余るものばかりだったため、ゼウスを力を没収し、人間にしようとしたが、ゼウスの耳にそのことが耳に入ると自分のしもべの神を連れて戦争が起きたのだ。

ゼウスとオーデインの一騎打ちは何日、何世紀まで続いたが、ある時に決着をつけた。

なんと、オーデインが膝をついた。ゼウスがオーデインにトドメを誘うとしたときにデーメーターが自分を庇つたではないか。

結局、ゼウスは逃げ、さいごに自分を愛していたことを告げて死んだデーメーター、オーデインは泣いた。初めて涙を流した。

必死に戦つたのだが、彼には逃げられ、自分を愛したのも去つた。それをみたアトラギアは、オーデインの神力を消失させる代わりに、デーメーターを人間として蘇らせる提案をした。

オーディンは考えることもせずその提案を受け、そしてある条件をつけた。

俺も一緒にはだめか

そして、数十年後…

ある男女が結婚した。

それから、数日もたたず、彼らに子供ができた。双子の男の子だった。

(まさか、これは!!!)

そう、桐島恭二が誕生した瞬間だった。

理不尽なのは昔から（後書き）

すいません。

色々考えたのですが、何気に見る人がいるんですね

詰まらんことを口にしました。

感想などは、お待ちしています。

なんとか持ち直し（前書き）

今回は、長く書きました。

オーディン
神 Side

「……………」

恭二は、まだ眠っていた。多分今は、過去を見ているのじゃろ。

「オーディン様……………」

もうお休みになられてください。

もう、恭二様がこられてから4日間ずっとここで休みにもならず、食事すらとっていないと聞きました」

私の補佐をしているルシファーが言う。

「……………」

「はあ 普段なら仕事をさせたいのですが、今は言いませんので、きっちり親孝行してください」

「ありがとうルシファー」

「気にしないでください」

いえいえと言ってルシファーが病室からでた。

いつも迷惑をかけてばかりだが、やつほどいい補佐をしてくれる奴はいない。

「恭二、済まない。こんな過酷な運命を見せてしかも、その運命すら背負わせてしまった。

本当に済まない……………」

悔やんでも悔やみきれなかった。本当なら私が行くべきなのだか、
“今の私”ではいけないのだ。

「気に…する…な、お父さん」

「……………！！！！ 恭二！！ 大丈夫か。
意識が戻ったのじゃな」

オーディン
神 side out

恭二 side

目を開けると、神が泣いていた。
俺は初めて父がな…いた？

「おい、横にいる女性はだれだ……浮気か」

横には、女神がいた。

粉雪のような白い肌、髪は満月の光を当てたような金砂の髪、目は
大空を見ているかのように吸い込まれそうだ。
そんな女性が神（笑）の隣にいた。

「いつぺん死んでみる？」

「ゼエ……………ゼエ……………」

「ハア…………ハア…………ゲホオ、ゲホオ」

「大丈夫ですか、お義父様」

え？ お義父様？ あれこれは……………

前にいる彼女は神（笑）をお義父様と呼ぶ

神（笑）は俺の父親だった

神（笑）には俺と兄がいて、どちらかもしくは、他にもいる可能性
アリ

だか普通、兄または他の場合、普通に一緒にいるか、一人でいかせた

後者は有り得ない。前者はいない

ま…………まさか！？

「恭二、考えている通り。彼女は……………
……………許嫁だ」

は……………！！！！？

「お父さん、少しO H A N A S H I Iしようか」
「違つぞ！？ これには深い事情が ザシユ… 痛い、痛い、指が、

頭蓋骨に入ってる……！　俺はお前の……「ダメレ　ガシヤ」ギヤア
アア……！！！！！！」

ボタン……

そして、その病院では、老人の悲鳴と若者の狂声が聞こえたと言っ。

数十分後………

「君の名前は」

「ペンタエリトリ・ツールと申します」

恭二side out

エトリside

「ペンタエリトリ・ツールと申します」

気づくと恭二さんが、帰ってきました………既に灰になったオ
ーデイン様と共に

「気にしなくていいよ………所詮神（笑）の運命だし」

〜回想〜

【居酒屋 超電磁砲】

俺は今、トールと飲んでいた。

俺とトールは昔から酒には強い、アルコール50度の酒
しを飲んでいた。 幻想殺

「なあ、オーデイン」

「なんだ トール」

「相談したい事があるんだ……………」

トールが質問なんて珍しいな。普段は聞いてもらう立場だが、いつも聞いてもらっているんだからな

「どうした？ 珍しいじゃないか、お前からなんて…三百億年ぶりだな」

確か…エトリの名前だったけ？ いきなり聞くもんだからびびったな。自分の娘は、自分で決めるって言ったんだだけか。

懐かしいな、元気でやってるかな、デーメーテールいや、綾子、恭二、総司……………」

「最近、エトリと一緒に風呂に入ってくれないんだが……………」

ガシヤ ン！！！！

「大丈夫かオーデイン！！！！ 久しぶりに酒に酔ったかのか！！！！」

「違うわ!!! お前が阿呆なことを聞くからだろ」
親バカにも限度があるぞ。流石にこれはないわ……確か、エトリも
恭二と同じぐらいだったな。

「えっ………だって親として同然じゃないか」

「え、何？ 俺が悪いの。なんで、こいつありえねーみたいな顔し
てるんだ。」

普通だからねおかしいのはおまえだからな」

「あとさ」

「まだあるのか」

正直、勘弁してくれ!!! 流石にヤバいぞこいつ。下手すると、
人間で言う変態の部類だ

「彼氏とかいるのかな。」

男と歩いてる姿とか見てないし」

ドンガラガ シャーン!!!!!!

ヤバいこいつ、今回は机ごと吹き飛ばしてしまった。

「でき、もし連れてきたら?」

これは聞かないと

「それは………全力で叩き潰す」

「だと思ったよチクシヨ

！！！」

ダメだ。こいつ本気のバカだ。

「だって、俺よりも強くないとエトリを守れないじゃないか！！！」

「オメエよりつえー奴なんかひとりしか見たことがね よ！！！」

そう一人だけな……………

「誰だそいつは！！！！ 今すぐ叩き潰す」

「……………ゼウスの野郎だ」ボソ

その名を呟いた瞬間、トールのやつが表情が、固まった。

「やつは死んだのか？」

「いや、生きてるさ……………なんせ仕留め損ねたからな」

「済まねえ」

「気にするな。次こそは全力で潰す！！」

力を入れた拳で、机を叩く

「あっ！！！！ そうだ、おいトール。うちの息子はどつだ！！
やつはいいぞ」

「クリネルスか、あいつは、やべーぞ……………悪評が」
確かにあれはできが悪いレベルを超えたからな

「いや違う、俺と綾子……いや、デーメーターとできた息子さ」

「……………!!! 何!? 彼女は、あの時死んだはずじゃ」

「いや、確かにしんだが………転生させたんだよ。」

俺の神力をすべて使って、アトラギアに手をかりてな」

「だから、人間界に行っていたのか。」

で、神になれるのか?」

「確か、5歳の時はすげーよ。」

総司は、上級神を凌駕するぐらいだかな。」

恭二は……………あれは、本物だ。」

あいつは、俺の次の第……………いや、アトラギアと同じぐらいだ」

「両方ともすげーじゃねえか!!! よし、決めた!!! 恭二の

方をもらおう」

「ただ、問題があるんだよな」

「何があった」

「恭二に関しては、一歩引いていようとする癖があるからな。」

総司を活躍させようとするかな」

だからいいと言うか

「だったらなおさらだ。」

名をなんといい」

「あつちでは、桐島恭二、こつちでは、カサエル・R・オーデイ
ンレックスンスってしている」

「カサエルか……………お前にしては上出来じゃないか。

よし、今日はエトリの許嫁ができた日と言つことで飲むぞ……！」

「だな……！」

そして翌朝、二人の神が酔って休んだのは別の話……………

（終了）

俺達は、お父さんの話を聞くと……………

「私ちよつとお父さんとは O H A N A S H I I してきます」

「奇遇だね。俺もちよつとお父さんと O H A N A S H I I した
いと思つていたんだ」

全く奇遇だな。

またその日は、神様二名の悲鳴が聞こえ、息子を大切にと言つ暗黙
の掟ができたとかなんとか

移動して

【神様の神の間】

説明しよう。いきなりアトラギアと言う神の神と呼ばれるオーディンの上司から呼び出されている。

「よくきたな。オーディンの子よ」

すごく………神です。

つてか、ここにいる神（笑）とその右手（親バカ）よりも神様らしいな。

なぜなら、黒き顔を埋め尽くしそうな髪、顔はかなりイケメン、その上玉座に座り何より堂々としている。威風堂々とはこの人を指すのだな

「あの神（笑）の息子ですが、何でしょうか」

とりあえず単刀直入に聞こう

「あの恭二様、私みたいな中級女神がいていいのでしょうか？」

エトリ、そこか気にするところか。

アトラギアってすごくイケメンだぞ

「大丈夫だよエトリ。君がいたって関係ない、だって、ここには、神（笑）やの右手（親バカ）立っているんだぜ。大丈夫だよ」ニコ

「……………！！！！ はい／＼／（か、カッコいい）」

なんだ、エトリやついきなり頬を赤らめて……

「やっぱりお前の血をちゃんと引き継いでるぜ。天然フラグ製造マシンだぜ」ボソボソ

「だろ、ちなみに、前世は、可愛い系だ」ボソボソ
「訂正しよう。お前より酷い」

なんか老人どもで話し始めてやがるな。

「オッホン！！ では、本題に入ろう」

いいタイミングだな

「恭二……いや、カサエルよ私の代わりに神をやってくれるか」

「跡を継げといたいたいのですか？」

「そつゆつことだ。やってくれるか」

「いや、さっきの世界に戻りたいです」

話を切るのはいつも道理だ

「ほお、なぜだ。あれは所詮、アニメの世界だ。なぜ、そこまでこだわる」

「何でこんなことを聞くのだろう
決まっているだろ」

「俺は、俺の心情に肩入れしているだけだ！！！！」

「ほお……」

「俺はいつまでも変わらない
やなんだよ。」

中途半端だけは

「結末があるならまだしも、中途半端だけは嫌なんだ。むかしからな
！！！！」

「結末？ あるじゃないか
貴様の死という結果が……」

「そうゆう意味じゃない！！ バッドエンドじゃ嫌なんだ。
せめて、ノーマルエンドじゃないとな。
言っていることは無茶苦茶かもしれないが、理屈や理論じゃ語れな
いんだ！！ 自分の気持ちは」

「……………」

「流石お前の息子だオーデイン。
あれは純度100%だな」

「そっか？」

「……………（カサエル様カツコイイ）」

アトラギアは黙り、オーデインとツールは何か喋っているが聞こえん

「時の老人だっけか？ あんな化け物をほっという言い訳ない」

「……………！！！！ 時の老人だと！！！！」

「……………！！！！」

時の老人と言った瞬間、空気が固まった。

「やつが生きていると話が変わる。」

カサエルよ、さっきの世界に戻す代わりに条件をだそう」

「条件……………？」

何だろう？ 時の老人を倒せって言っなら殺ってやるぜ！！！！

「野郎まさか！？」

「そのとおりだオーデイン。」

時の老人……………いや、ゼウスを倒して貰おう。

それが条件だ」

「……………」

オーデイン、ツール、エトリが啞然としていた。

ゼウスは確か……………！！！！ 野郎をぶっ飛ばす理由がまた一つ
できたな……………

「アトラギア様、ゼウスと言えば、あの神に反逆した神ではありませんか!? オーディンが死闘を繰り広げもご確認だったはずじゃ」

「……………」

「オーディン……………」

オーディンが黙った。それはそうだろう、自分の子供に仇をとらせるなんて…

「……………けるな」

「お父さん？」

「ふざけるな!!! アトラギア、確かに俺はてめえにかしがあ
るが、何でそんなことを息子にやられようとするんだ!!!」

「オーディン落ち着け」

トールが尽かさず止めにはいるが

「黙ってる!!! そうか、貴様エトリまで使う気だな」

「……………!!!」

トールさんもまさかの発言にびっくりしている

「だってそうだろ。恭一のサポートとしてエトリを連れて行かせ
るんだな。」

随分、知らない内に汚くなつたなアトラギア……」

「流石だオーデイン、だが仕方ないのだ。

奴には神しか戦えない！！、しかし神は、決まった時しか地上にいられない。それはそうだろう、神がいるだけで世界がほうかいするからな…… だが、カサエルは違う。

カサエルなら鍛えれば私のような位になるし、神力も高い、だからたよるしかないのだ！！！」

神様って、完全無欠じゃないんだな。

しかし、決まった時期にしか行けないのは、決まったことなのか

「だから頼むカサエル、奴を………ゼウスを倒してくれ………頼む！！！」

アトラギアに泣きつれた。

しかし、俺にはあっち系の趣味はない。

「わかりました、やります」

答えなんか決まっている。

「恭二、考え直せ。

相手は弱っているからって、もとは最高級神だぞ！。やつに勝てるはずがないんだ」

オヤジ（オーデイン）が言うが

「お父さん、俺はいつも兄を活躍させるようにうまくやってきたがな。」

今回は兄さんがいないし、時の老人にはあん時のやつもあるし、女神の時の母さんの仇もある」

「しかしそれは俺が……」

「だから……」

（乱闘中）

結構な時間後……

「ゼエ……ゼエ、だから……俺は……ゼエ……行くから……」

「だからハア……ハア……ダメだって……ゼエ……言ってる……だろ」

アトラギア・ツール「……（親子揃って頑固だなー）」

頑固親父が！！

「自分の道は自分で決めるから、父さんは口を出すな」

「お前を心配しているんだ恭二。」

この心配しない親はいねえんだよ」

「うん、うん」

ちっ、拉致があかねー

「アトラギアだっけか？」

頼む、条件を飲むからあの世界に帰してくれ！！」

「良かるう」「アトラギアてめえ！！」

張本人に言えば良かったんだよ。

「貴様を帰すのには、一週間かかる。

ルシファーよ、どこか部屋を貸してやれ、そこで準備を整えさせる」

「ルシファー、お前は「わかりました」 言う前に裏切られた！！
！？」

「オーデイン様、流石に上官の命令は逆らえません。
さあ、カサエル様、こちらです」

「ふざけるなああ！！！！」「俺はどこに泊まるの？」「おい！！恭二、
何言っ「私の部屋ですが……………」……………」

父さんが言うのをやめたらしい。疲れたんだろうな

「あの、すみません！！」

「どっしたエトリ？」

用事はすべて片付けたはずだが

「もしよければ、私の家にしませんか／＼……?」

「」「」

「ええええー……!……!……!」

一同、びっくり

「……まじ?」

たたた、多分冗談だよ、冗談……

「……はい」

「……()」

何言えばいいんだ……この状況で……!……! ……みえた

「流石にだめですよ、ツールさ……」

「オーデイン、式をいつやるか決めとこうぜ」

「やっぱり、子供ができてからのほうが……」

「オーデイン様、ツール様」

よし……この二人の暴走を止めてくれるんだなルシファー……!

「私が司会進行役で」

「止めねえのかよ！！！」

何故ノリノリなんだよ。

「流石、お前の娘だなツール」

「だろ」

「……………／／／」

何で、そんなに頬を赤らめてんの？ 俺には、死の宣告だったよ。

「父さん、ツールさん、ルシファーさん」

「どうした息子。……………わかったあれだろ」

「いや……………O H A N A

SHIしましょうか」

「……………」

流石ニネ、モウ我慢ノ限界ダヨ…

「アトラギアサン、ドコカ、アイテイル部屋アリマスカ？」

「右にいくとあるぞ……………」

「アリガトウゴサイマス……………デハミナサン、O H A N
A S H I I ましょうか」

そして、その部屋は、開かずの扉に変わった。
泊まる場所は結局、トールさんの家になった。

O r z

なんとか持ち直し（後書き）

いつものぐぐぐで意味もわからん内容でした。
大まかな説明

結局、オーデインの過去の記憶を見て、オーデインが自分の父と判明した恭二

それで、勝手に許嫁を作られた、それがエトリ。

オーデインに連れられ、アトラギアに時の老人を討伐を頼まれ、父との戦闘をして、なんとかクエストを受ける。

そして、世界に戻るのには、一週間ぐらい必要と言われ、ルシファ
ーの家に泊まると思いきや、エトリの爆弾発言で、許嫁の家に泊ま
ることになる

と言った感じです。

これからは、1日＝一話として七話をこんな感じでやります。

感想・指摘をお待ちしております。

ミドガルド生活 1日目 朝(前書き)

一応、1日が終わったらあとがきをかきます

ミドガルド生活 1日目 朝

1日目 朝

一応、何かあったときのために、日記を付けることにした。
俺は今、ミドガルドのツールさんの家にお世話になっているが、部屋がエトリと同じの部屋だったこれは神様達では、普通のことなのかもしれない。
と未だに一睡も出来ずにいたため、アクトとレッドクイーンの改良を改造を始めた。

昔好きだった、仮○ラ○ダーWで、出てきたアクセルのマキシマムシステムを取り入れることにした。これなら、カートリッジシステムより使い易く、なおかつ威力もカートリッジシステムの時の三倍以上出せる………恐るべし地球の記憶。

記憶と言えば、最近は何々と夢みたいなものを見ている。

その夢には、髪が白く、赤きコートを着ていた男性が、王宮の王室みたいな部屋に立っていた。

体……。

床には、レッドカーペットみたいなものがしいており、周りには計八本の柱があった。
しかしそれは、男が戦ったびに壊れていく。

鉛……。

今は、そこで目が覚めるから分かんが、後々分かるだろ……

「いや、眠いが眠れる気がしねえ」

健全な男女（女神）に対して、ただのダブルベットはないわー（恭二：前世では20歳、エトリ：トールさんが言うには20歳）

知らなかった。まあ、人間年齢200歳とかいわなくて、ちなみにトールさんは今年1と0が四十桁超えるらしい

神様って何でこんなにやばいんだろ……

現地地下室にいるのだが、何故か、24監視体制の人が、カギ穴から覗いてくるんだけど……勿論、寝てないから幻想ってオチは……存在しない。

「（や、やばい、凄く痛い。）

あれ、視線だけじゃなく、殺気や怒りの感情を俺だけに一点集中して送ってくるんだか……」

カギ穴を遠くからちらっと見たら……徐々に虚ろな瞳に変わってきた。

「（怖い……ただ虚ろな瞳になるならまだしも、徐々に変化するたびに部屋が揺れてるよ……）」

しかし、俺には時の老人を倒す使命があるんD A a a a a ! !

俺は勇気を最大限まで振り絞って、ドアノブに手をかけた……
バタン!!!!!!!!!!

かけた瞬間、ドアが光速で開いた。
そこには、金色の髪、蒼き目の神が立っていた。
まあ、神様以外ないがな……………
それでの俺の第一声

「あの〜どうしたのでしょうか？」

勇気?……………そんなもん、使いきったさ

「表にでろ」

そして俺は、恭也さん、クロノと同じシスコンのチュールさんとの
出会いでありました。

俺はいきなり、剣を持たせられた。

「何故これを？」

フツと笑った。ひどっ!!!

「敵に情けをかけるだけさ」

「それは、どうゆうこと」

セリフを言う前に、剣を抜かれた

「俺の名前は、チュール……………妹ニツク害虫八……………
…斬ル!!!」

「シスコンだあああ！！！！」

思わず叫んでしまった。

「妹を大切に思わない兄がどこにいる！？

剛岩斬！！！！」

剣を紙一重で避けるが、その地面には地割れが起きていた。

「ほお？ 流石オヤジが選んだだけのことがあるな。

普通のや……………害虫だったら逃げ出していたぞ」

これはひどい。言い直した必要性ない上に、そんなもんみたら誰だって逃げるわ！！！！

「それは、ど「獄牙炎極剣」人の話を聞けエエエ！！！！」

火を纏った剣を防ごうとするが、両者の剣が溶けた。もし溶けてなかつたら、死んでたな……………確実に

「ちっ！！ こい！！ アグニ！！ ルドラ！！」

嵐と炎の双剣 アグニとルドラを呼んだ。

『兄者、初めての出番だぞ！！』

『そつだな弟よ』

と永遠のトークを繰り返すアグニとルドラ。

「喋る剣か……面白い。
なら、俺も本気でいかせてもらおう!!」

そうすると、地面から一m七十? 剣が出てきた。

「こいつは、ガイヤ。

元々は、オヤジの持つガイアを元に作られている。
防げるか!? 俺の剣(魂)を」

多分、俺はこの人と同じ戦闘狂だな。

証拠に彼が剣を持った瞬間、心が高鳴っているかな(恋ではない)
楽しい……

「関係ないですよ。俺の剣(魂)が折れることはない!! 折れる
時は即ち、死んだときだけだ!!」

「そうだな……

上級神 【閃撃せんげきの牙】 チュール・ツール」

騎士の名乗りのようなことをしたチュールさん

「そうですよ……

アトラギア級 二つ名はなし 衛宮恭二またの名をカサエル・R・
オーデイン 行きます」

静寂が、続く……

「(相手は相当な手慣れしている。

こっちは、短期間みっちりやったただけだが、殺気ぐらいはだせる)」

二人の殺気が、フィールド（戦場）に満たされる。

そして、葉が落ちた瞬間

ガキイン！！！！

二人が、動いた。

「チィ（主導権をチユールさんに完全に持ってかれた。だが、アーチャーみたいな戦い方なら）」

「（こいつやるな！！ ただのあまちゃんではないようだが、剣が荒い。 短期間で身につけたんだな。これは……………化けるぞ！！）」
二人の戦いはまるで、Fateで言う、アーチャー対バーサーカーのガチンコバトルである。

「爆炎業閃」

「FLAME dancing」

チユールは、閃光のように鋭く、そして重い一撃を放つために【閃撃】と呼ばれ、彼の名乗りには、誰もが引き腰で去っていくほどだ。恭二は、知らないだろうが、チユールは上級神最強である。

一方、恭二はセイバー、アーチャー、ランサーと死合いをして、その中で形を身につけ、それを独自の形に変えるという化け物地味だ力もち、サーヴァントからは天才と呼ばれている。

それで止まるならいいが、相手の技を可能ならものに出て、ドラ
イブを使った時も、セイバーの風王鉄槌ストライク・エアーを二回見てだけで、使うこ
とが出来、一分後には、それをドライブに使っていた。(セイバー
達は呆れていたが)

「ちい！！ 逃げたか」

「危ない、危ない」

FLAME dancing

これは、前世で、恭二がエアギアの炎の道を見たときにやってみた
くてやった技である。

これは、高速に摩擦を起こし避ける回避技である。

その避ける姿が、足に火を纏いながら踊っているように見えたため
である。

今回はそれに、ルドラで暴風並みの風を起こして、アグニで摩擦火
を大きくした。

爆炎業閃

こちらは、閃光の如き速さで近づき、獄炎と呼ばれる。ラグナロク
の世界を燃やした炎ほど行かないが、彼はそれの一步手前火力の炎
で爆発させて斬る。

火は、神様の世界では嫌われているため使えないが、獄炎は彼の努
力の結晶とも言える。

二人の静寂の打ち合いが続いた。

それを破ったのは……

「だいたいわかった」

「力の差か……」

いや………

「貴様の技が……」

「………！！！！面白い、やってみろ」

「ああ、こい……！！ イフリート。」

アグニとルドラ、イフリート、粒子分解、複合……！！ 獄業炎籠手
フェニックス……！！」

彼の手には、一段と強くなった炎、と嵐を纏った籠手が装備されていた。

複合魔具フェニックス

魔具と魔具を融合した魔具。

これは、急速に魔力を食い、ダンテでも5秒が限界である。

それは、強靱の魔力と神力を持つ恭二だからこそ出来るのである。

「いくぞ、チユール……！！！！ 泣いても笑っても次で決める。

俺の炎（情熱）と剣（魂）で……！！」

「よかろう………次できめるか………見せてもらおうぞお前の炎（情熱）
と剣（魂）を」

「ああ………」

「最後に笑うのは」

「俺だああああ！！！！！！」

「炎神化、食らえ！！」

チュールは、自らを火を纏い、剣に溜めていく

「アクト！！ イクシード全開！！ マキシマムシステムオーバー
ドライブ！！！」

噴射剤の一滴まで使う！！！」

アクト「任せる恭二！！ イクシード限界地突破した。
Maximum Drive！！！」

恭二は、レッドクイーンのイクシードを完全に使い、さっき完成した。疑似マキシマムドライブを使い炎の火力を底上げた。

複合魔具フェニックスの火力も使われているため、まさに魔神炎

恭二は、純粹の炎に黒い炎が混ざっていた。

チュールは、地獄を再現したような灼熱地獄の炎

「レーヴァテイン！！」

「名前は仮だ！！ 約束された（エクスカリバー）」

最後の一撃…… 彼らは知らないが、既に野次馬がわんさかいたことを

「インフェルノ……！！！！！！」

「転輪する勝利の剣ガラティーン……！！！！！！」

一瞬の閃光……それがなくなりそこには、

「俺の……勝ちだ」

「ああ、俺の……初めての敗北だ……」

ひざを突いていたチユールがいた

「……ウオオオオオオオ！！！！」「」「」

野次馬の歓声。

その日の新聞には、このことで一面を飾ったと言っ。

続く？

ミドガルド生活 1日目 昼

あの戦いから少したち、昼になった。

まさか、見られているとは思わなかった。その新聞記事には『閃撃対オーデインの名を持つもの!!!』とかかれており、その日の朝食抜きになりそうになったが、エトリのおかげで、朝食抜きは脱したが、見返りとして……

「カサエル様、これはどうですか？」

買い物に連れて行くことだった。

確かに買い物に行かなければならないが、まさか服を買いに連れられるとは……周りの視線が痛い。

「（アクト………ごめん。多分、無理だと思う）」

目的は、今日の戦いで駄目になったレッドクイーン改造とアクトの能力上昇を目的なんだが……

「カサエル様………やっぱり楽しくないですか。

こんなわがまま娘と一緒に………」

ぐう………最近わかったことは、アニメやゲームなどで涙目+上目がやばいとか言っていたが、実際見ると、理性が駆られる。

「気にするな。今日の戦いの傷が痛むだけ」

今は半神の状態だからだろうか

「だ、大丈夫ですか！？ ……………お兄ちゃんにはO H A N A
S H Iしないと……………」

チユールさんごめんなさい。
地雷を踏んだみたいです。

家についた瞬間、エトリはチユールさんの部屋に行った……………

ミドガルド生活 2日目 朝(前書き)

ミドガルド生活 2日目 朝

やっとだ……やっと一日目と言っているが、実際は2日目だが、それがやっと終わった。
なのだが……

「やばいな……朝だ……」

そう朝だった。

「（考える、昨日何があったか……あつ！……）」

それは、昨日の夕食に戻る……

「ああ……つかれたあ。
女性って不思議だなあー」

なぜ、あんなに服を買ってもあきないんだ……！ 俺にはよく分かんらん……！

「まあ、なんとか……アクトの……部品を買えたし……ふあ……寝みいから仮眠をとるか……」

この後の悪夢があると知らず、俺は意識を手放した。

「（また、あの夢だ……………」

いつも同じ夢を見ている。

そこにいる男は、白き髪、赤と青の目、ワインレッドのコート、それに見覚えがある武器 レッドクイーンみたいな剣を持っていた。だがその周りには、悪魔がいた。

数は二百を超えるのだが、引くわけが出来なかった。なぜなら、後ろには村の人々がいたのだ！？

そして彼は、いつも道理に詠唱をする。

体は……………

鉛と成り立っている

ひたすら、剣（正義の味方）をめざしているが、

力はあるが……………

すべてのものを救えるが

覚悟はない

それをやり遂げる事ができない

幾千幾万の戦火を駆け抜け

世界にある違法研究、貧しき人々を守り為に戦火にいき

視界が光に包まれ、意識をなくした。

「……………うーん……………」

目を覚ますと夜になっていた。

「またあの夢か……………おきているときもだが、寝ているときも健全だな」

そうして、ソファーから体を起こすとそしてドアが開いた。

「カサエル様起きましたか」

エトリだった。

「ああ、済まない。迷惑をかけたようだな。」

「いえいえそんな、あのですね、実は今日の料理を私が担当するのですが……………食べますか」

「ああ、勿論貰おう」

さつきまで、暗かった表情が、パアアアと明るくなった。

「では、一生懸命頑張りますね!!」

「楽しみにしているよ」

「はい!!!!!!」

エトリは、気分が高まっている状態で、キッチンに向かっていた。

「アクト、レッドクイーンは……」

『損失率は68%、あまり喜ばしくはないですね』

「不味いな、コレじゃリカバリーよりも改造した方がいいな」

『そうですね。このままりカバリーだと最低二週間は使えないですよ』

「カサエル様、夕食の準備ができました!!」

おっと、それはグッドニュースだ。

「アクト、レッドクイーンの件は後でだ。先に飯を食べる」

『ではマスター、リカバリーのためスリープモードに入ります。フレームと

推進剤噴射機構の方を優先しますが、よろしいでしょうか』

「頼んだよアクト」

流石アクト、最初に造ったデバイスよりも使える。
アクトはEXの転生させたものである。

さーて、食事をしに行きますか。

…これが、行きますが逝きますに変わるのと言つまでもなく、その
後の記憶は……………覚えてない、いや思い出したくもない。

『マ、マスター、大丈夫ですか！？ いきなり謝りだして』

「大丈夫だよアクト、ミドガルドにいるのに三途の川に入れるんだ
な」

向こう側であんな人達に呼ばれたら誰だって逝くよ

『マスター、それは絶対に大丈夫で済む範囲外です！！？ なに食
べさせられたんですか？』

ガダ……………

「……………あれは、食べ物じゃない……………食べもの怖い…………
……………ガタガタブルブル(。(；(」

『味ですか！？ 見た目ですか』

「分からないよ…… なんか本人は、「母の味を再現してみました」ってなんか黄金に輝き、虹色の煙が出るカレーだったんだ。匂いは、カレーではなく、魚の生臭さがあって、それを食べた瞬間に甘味、酸味、塩味、苦味、辛味、渋味、刺激味、無味、脂身味、アルカリ味、金属味、電気の味の味覚で感じられるものがすべてが絶妙なハーモニーを出していて、どれか一つ崩れたらドミノのように襲っていきそうだった。

歯ごたえもおかしくて、カレーのはずなのに、歯ごたえがあると思っいたらいきなりゴリゴリ言い出したすぐにシヤリシヤリ変わった時にねちやねちやに変わってしにそうで神力を使っていたからいいものの下手したら人間の臓器を溶かすほど硫酸の水王が入っているかと思っただよ………」

もう二度と食事をしたくない

「……………耐え
ましたね」

「ああ、ここまで来れたのが、奇跡に感じるよ」

何十分後

「さあ、出来た」

新型レッドクイーンの完成……！

今回は、金属専門店まで行き、ありとあらゆる耐熱性と衝撃に強い

金属を購入し、特製の釜で、イフリートとアグニとルドラを複合した魔具フェニックスで溶かし、能力強化のリベリオンとケロベロスを使い、急激冷凍して造ったから大丈夫だろう……………多分？
まあ、そこは主人公補正や小説だからなどを使えばいいからな。

『マスター、それを言うのは不味いのかと……………』

「大丈夫、大丈夫。

いざとなったら、廃品回収の時に出すから」

アクトが怯えだした。

『マスター……………嘘ですよね……………(。。(。)]』

「冗談に決まってるじゃないか……………(黒い笑顔)」

やだなー、AIBOUにそんなことをする訳ないじゃないか……………
……………体罰はあるが

『マスター！！ 私はマスターのこと信じてますからね！！ 本当ですよ！！』

「やらかさなかつたらな……………」

最近聞く、デバイスクラッシュはあまりしたくないからな。

『YES・myrroaa』

「その言葉信じるから」

まさか、EXがこんなキャラだったことには驚いた。

コン、コン

「入るぞ」

ドアを開けて入ってきたのはチュールさんだった。

「はい、何でしょうか」

「大丈夫だったか？ 妹の料理？ を食べて」

ああ、あれか：あれを料理と呼んでいいのか

「本当だったらお世辞の一つをいいたいのですが……はつきりいます。あれは“核兵器”よりも酷いです。あれは料理ではありません、兵器です。どう考えてもおかしいです」

悪いがはつきりと言わせて貰わないとこちらの寿命が確実にゼウスを倒すより速く戻ってきそうだから。

チュールさんは、申し訳ないようにしていた。

「済まない、こちらのミスだ。本当だったら、卵料理を食べるはずだが、メイドがカレーを作ってしまったあの大惨事が起きた」

疑問が 出来た。何故卵料理？

「それはだな……」

神様はみんな心を読めるのか!!？

「エトリは、何故か卵が入っていると美味なんだが、それ以外は、兵器に相当する何かに変わる。原因は分らん」

「チュールさんも食べましか」

「ああ、あのときは瀕死状態になり、病院に運ばれたよ、そして三日間生死の狭間でさまよったよ……………思い出すだけでまたあのと
きと同じになりそうだ……………」

瀕、瀕死状態つて、俺は運が良かったようだ。

まだ三途の川で済んだからな

『マスター、全然良くないと思うのですが……………』

「やっぱり逝きましたか……………三途の川に……………」

『無視！……………！』

アクト、構っている余裕が無いんだ。

「やはり逝ったか。いいところだったな。あそこだったらいても
イイかもと思ったぐらいに」

「ですよね……………」

その後、俺とチュールさんで語りあった後、軽く模擬戦をした。

ミドガルド生活 2日目 朝（後書き）

和樹：駄目だ！？ うまく原作に介入が無理だ。

多分、strickersが初めての原作介入だと思う

恭二：……………ダメ作者

和樹：うっ！！ グサグサ

ルシファー：駄作製造人

和樹：（。。。。）グハッ！！

恭二：全く、ノープランだからだ。

ルシファー：いつも思いついたら書くからおかしくなるのですよ。

和樹：や…め…て…く…れ ヨロヨロ…

恭二：次回は、なんだよ。いきなり最終日…

ルシファー：とんだくずですね。

和樹：イイじゃないか！！ ここで、時間稼ぎ紛いのことをするよりも、さっさと原作介入した方が…

恭二・ルシファー：本音をぶちかましたな（けましたね）

和樹：感想などをお待ちしております。

恭二：来ると思つか…

ルシファー：きませんでしょうね

和樹：（、・・・）イイモン…

ミドガルド生活最終日（前書き）

いじまをいじります。

いじまをいじります

ミドガルド生活最終日

恭一 side

いや〜長い一週間だった。皆さんには分かりませんが、すごかったですよ……………マジで

チュールさんとは模擬戦（死合い）をしてそのたびにチュールさんがエトリにO H A N A S H Iされ、俺はトールさんのトールハンマー（雷撃の鉄槌）にあい、そしてまた、エトリにトールさんがO H A N A S H Iにあい、トール一家の男はリアルな血の海に沈んでいた。

まだそこで済むならいいのだが、俺はエトリに昼間はずっと理性を刈られ主に女性の下着売り場や腕に胸を当てられて……………

夜は、ひたすらこの世界の勉強とアクトの強化、複合魔具の成功率の上昇の鍛錬など一日中自分の時間が、夜しかない状況だ。

まあともあれ、約束の時がきた……………

「カサエルよ、準備は出来たか？」

アトラギアさん久しぶりだなー

「大丈夫です。今すぐ「誰が行かせるか！」なにいつてんだオヤジ

「!!?」

殺気とどす黒いオーラがでて正直、泣きそうだ

「神様がなんといいおうが、俺は許さん」

あんた…神だろ!!!

「何故だ!! オヤジ!!!」

「そうか………」

なんか知らんが、納得してくれたか!!!?

「………よろしい、ならば戦争だ」

あれ? おかしいな、あの人なにいつてんだ

「私に互角に戦えなければ、やつには勝てん。だから………試してやる」

面白い わーい、恭二が戦闘狂になった()

「オーディン、なにアホいつてんだ!! そんなこと」殺ります」

おい、やるのはいいが、漢字間違えてないか?」

フハハハハハ、遊んであげるよお父さん

【フィールド 冥土】

戦いの場は素晴らしい場所だ。これなら死体の処理の手間が省ける。

「まあ、なんだかおかしい要素はいつぱいだが、突っ込まないぜ。

両方は準備は大丈夫か」

「大丈夫だ」「問題ない」

父との戦いか、ヤバいなアドレナリンが大量に分泌してきたみたいだな。

すげー緊張感と殺気だ。

「……………」

「……………」

緊張が走る…………

ダッ……!!

先に動いたのは、オーディンだった。

「やってくれんじやないか、オヤジ」

俺はレッドクイーンを対抗する。

「……………」

オーデインはなにもしやべらない。
その手には、赤々しい剣があった。

しばらくの剣の斬撃音しか聞こえなくなった。

side out

「すごいな………」

カサエルとオーデイン様の戦いはまさに、剣舞だった。

「ヤバいな、オーデインの奴、レーヴァテインを使ってやがる」

「……！！！！ レーヴァテインですか！？ 本当ですかお父さん」

「ああ、あれは、ラグナロク戦役でオーデインが神殺しに使ってやがったからな」

レーヴァテイン……鍛冶屋のランゲルが打ったとされる魔剣に劣らない神剣。

ギルガメッシュ様が使っておられた剣は、「真実を識るもの」と表現する。天地開闢以前、星があらゆる生命の存在を許さなかった最初の姿、地獄そのもの。それは語り継がれる記憶には無いが、遺伝子に刻まれているというに対し、レーヴァテインは、最強という概念と業火を表した剣で、自分の使う主を選び、オーデイン様以外の神が持った瞬間、燃えて何物でも消すことが出来なかった最強にふさわしい神剣

「確かあれは、オーデイン様が裏切りのゼウスの戦いで消えたんじ

「や

戦いの途中に剣が砕け、それで神ミドガルドが燃えたという

「いや、あれは壊れたんじゃない。あの剣が勝手にやったんだ」

そのひとことで色々とわからなくなった。

side out

あれから一時間……

「……………」

「くそ！」

なんてことだよ!! こっちがただ消費しているんじゃないか

『マスター!!』

「(アクトか! どうした!!)」

『彼の謎が解りました。あれは、神化を使っています。ここには、大量の魔力がありました。いきなりなくなりました、その瞬間にオーデインの魔力が上がりました。』

『

ひ、卑怯だろ!!! こっちは神化を使えないんだ。
全く油断して……

「エアープラスト」

「あつぶね!!!」

今まで見て、エアープラストは、剣で起こした風を使い、風を爆発させたかのようにするみたいだ。
今あたりかけた……見切ったと思ったのに

「この卑怯者!!!」

「最初に本気で殺ると言ったはずだが」

「嘘だ!!! 嘘つけ、ぜってー言っていない」

「言った」

「言っていない」

「言った」

「言っていない」

「言った」

「言っていない」

斬撃音と一緒に聞こえる口喧嘩

「確か、あんたは、俺のオヤジだよな」

「そっだが」

俺は剣を払い、距離を離す。

「なら、一撃必殺で決めようじゃないか」

「同感だな、薄々いおうと思った所だ」

俺に火、オーデインに風が回りに集まる。

トール「あれはヤバいな。ラグナロク戦役で、オーデインが使った最強最悪最低の技だ!!!」

「最低は余計だ!!!」

確かに… だが、面白い。ぜってー勝つ

「いくぜくそオヤジ、これが反抗期の力だ!!!」

「笑わせる!!! 舐めるな大人の力を!!!」

「さっさとくたばれ!!! このくそオヤジ（バカ息子）!!!」
「!」

「（言うせりふまで同じなんて………どんだけなかいの!」

?)「「「

「(まさかの俺だけ一人イイイイイ!!!)」

両方の親子の息が一つになった瞬間だった……………一名を覗く

「オヤジいくぜ!!!」

アグニ!!! ルドラ!!! インフェルノ!!!

粒子分解! 変われ、獄炎を纏いし嵐の籠手 複合魔具フェニックス!!!」

「全てを燃やす尽くす風よ
世界を浄化せよ!!!」

「アクト、イクシードを全て振り切れ!!!
そして、アクト! マキシマムドライブ!!!」

『Yes・sir Maximum Drive!!!』

レッドクイーンからバイク音がなり、炎が纏われる。

「レーヴァテイン……」

「インフェルノ……」

「両方とも流石親子、火と風を纏っているな。
しかも、炎の出し方までも似るとは、これは傑作だ」

「バーフレイグ!!!!」

「ストライク！！！！」

二人の攻撃が、大地を引き裂く。

「うおおおお！！！！」

「ハアアアア！！！！」

二人の足元がえぐれていく。

「お父様！ カサエル様は大丈夫ですか！？」

さっきまで、びっくりの連続で隠れていたエトリが出てきた。

「正直、オーディンのやつが押してやがる」

「大変！！ すぐにやめ」だが…「どうしたんですか」

「だが、坊主も諦めてないようだ」

そろそろ決着がつく

「まだまだ！ まだ終わらねえ！！！！」

「諦めも悪い所も似ちまったか…… だが、もう終わりだ。
フルドライブ」

「ぐう！！！！」

レーヴァテインの火力が上がった。

「くそおおお！……！」このままじゃ負ける」

いいんじゃないかな

「（な……に……）」

頭に声が響いた。

負けたっていいんじゃないかな

「（ふざけるな）」

だってそうじゃないか……恭二

「（……………）」

俺だよ、俺

目の前には……

そつだ、俺はお前だ、恭二

俺がいた。

いつの間にか風景が変わった。

「（ここは……どこだ。

あれは、だれだ）」

そこには、夢にまで出てきた奴がいた。

「よお、俺

」

まさか！？

「懐かしいな、まさか俺と戦うことにはなるとは

」

「決まっているじゃないか。

貴様じゃ、なにも守れない」

「なに言っているんだ。

貴様は、アーチャーにでもなったつもりか」

「アーチャーか……いや、懐かしいな、ああ懐かしい。確かに彼と同じ立場だな。

今ならわかる。彼の本当の気持ちか」

「なに言っやがる。」

おかしくなつてネジの二、三本ふきとんだか」

「俺は確かに、オヤジと戦つて勝つたよ。
だがな、それからは地獄だった」

訂正しよう、こいつは、確実に吹き飛んでる。
だが、未来の俺は語り続ける

「何でなんだ！！ 正義の味方つて奴は！！！ ただの損な役割じゃないか！！ 俺は、救つた。すべてのものを、一滴もこぼさず救つたさ。」

だが、何だ！？ 救われて起きながら、いざとなつたら誰もが俺のせいさ。

おれは、アーチャーと衛宮士郎、衛宮切嗣を知っているからすべて救つた。何もこぼしもなくな。
だが、なんだ。そのたびに俺はアーチャーのように大切な者を失つた。

なのは、フェイト、はやて、シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラ、ヴィヴィオ、エリオ、キャロ、ティアナ、スバル、ギンガ、クロノ、ユード、リインフォースアイン、ツヴァイ皆が消えていった。必死に両方とも守つたのに、関係魔導師や市民を守っているのに、何故だ！！？ なぜ！？ 彼女等が死ぬんだ！！！」

「……………！！！」 嘘だ」

何故だ、彼女達の死……それは、俺に深い絶望を与えた。
そして、俺は、なのは達の死の真相を知つた。
それは、forceに至る。そのときには、悪魔の魔帝ムンドウスとゼウスを倒し、機動六課は俺がいることにより、悪魔退治も専門にもなつていた。

そのときに、ある事件が起きた。しかしそれは罠だった。そこに到着すると、そこには時空管理局のAAAランクの魔導師達がいた。そこで知ったことは、上層部が企みにやての機動六課が邪魔だったらしい。それでなのは達と俺は何日にも渡る戦いの日々が続いた。一人、また一人と人数が減っていき、最終的に俺、なのは、フェイト、はやてになった。そこで、このことを知らせようとしたところ、クロノ、ユーノはすでに死んでおり、残り俺等になった。最終決戦、なのは達は、魔力の使い過ぎで動けなくなり、俺一人で対応する事になった。

俺は、必死奮闘した末に勝利し、なのは達のもとに向かうとそこには、なのは達だったものがあつたらしい。

「だから分かったのさ、どんな人間だろうとこぼしはする。なら、せめて自分の大切な者いや、なのは達だけは守らなければならぬ」

「そんな……………」

俺がやるうとして無駄なのか!? ただの自己満足なのか。

わからない、わからないわからない、わからない、わからない

「だから、そんな夢を諦めろ」

「……………フツ」

その一言で全てが吹き飛んだ。

確かに単純かもしれない。バカかもしれない。だが…………

「……………笑わせんな」

「何!？」

「ふざけるなよ俺、確かに解ったよ………あん時の衛宮士郎の気持ち………」

「何を言ってるんだ!？」

「彼の言葉だが、俺とお前は違う!! 俺は絶対夢は諦めない!!」

「なら貴様は、彼女達を見捨てるのか!？」 「違う!!」 そうかなら、貴様じゃ無理だ!! 俺にはできない事を貴様に出来るわけがない」

「勝手に決めつけんな!!! 決めつけるなら……それがお前の限界だ。」

お前は、夢に出てきた奴……いや、俺とは違う!!……」

「なら、どうするっていうのだ!!! どう変えるっていうのだ貴様の運命を!!……」

「なら、変えてみせる。」

今の俺が無理なら、もっと力を!!! 彼女達を守る力を手に入れる!!……」

くれてやるよ、とっておきをな

「なら、もらってやるっ」

そのとき、黄金の光に包まれ、その時にある言葉が浮かんだ。

身体は鉛と成っている

力はあるが、そこに覚悟はない

幾千幾万の戦火を駆け抜けて無敗

だが一度も勝利を欲せず

だが一度も切り捨てをせず

その存在はただ一人、阿修羅となりて最強を貪欲に欲す

己が人生に価値など無く、なぜならば

ただ守る剣となるために

ミドガルド生活最終日（後書き）

固有結界のアイデアはパワード様からいただきました。
ありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9319v/>

魔法少女リリカルなのは ~ 転生者の災難 ~

2011年10月22日03時23分発行